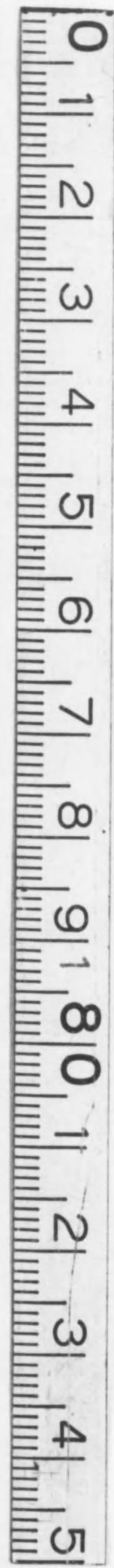


特265
143



始
←

特265
143



アンドリュウ・マレー著
一粒社編集部譯

聖餐

— 聖餐を正しく受くる心得 —



一粒社刊行



「我が記念として之を行へ。」

ルカ傳二十二章十九節



英譯者註

現代に於て聖餐に關する教訓・指導の書物が敢へて缺けてゐるとは言はない。殆どあらゆる派にはその禮典の執行についての教科書があり、その正當な使用についての心得書などもある。しかし乍ら、教授的要素と敬虔的要素とを見事に結合して、教訓と共に實例によつて、内省・讚頌・祈禱へと心情を振起せしめると共に、純聖書的な聖餐の教義を提示してゐるやうな書物は比較的少ないとせなければならぬ。

われらの尊敬する友人アンドリユー・マーレーのこの小著は、かゝる缺陷をよく充たすものと云ふべきである。努めて簡潔な言葉を以て綴られて居り、特にその文體に於て異つた點がない。然し乍ら眼光紙背に徹する人々は、そこに聖餐に關する新約の教義の適確な把握や、その價值と能力とに對する洞察や、聖餐の準

備について、心霊的熱心を高揚せしめる能力をよく認識し得るであらう。そしてこの書物をして、有ゆる熱心な信徒にとつての貴重なる助けたらしめるであらう。この書物の内容の三分されてゐる點なども亦、頗る暗示的であり、賢明である。マーレー氏も言つて居られるやうに、靈魂が、聖餐の贖罪的特異性を充分に認め、内的生活の成長への寄與をも識るためには、相當時間がかかるものと考ふべきである。聖餐の機會が多くなるに連れて——而して各教會とも現在そのやうな傾向を執つてゐるのであるが——聖餐の主日に先だつ幾週と、それにつゞく數週とを、本書が示すやうに、黙想と祈禱とに招くことは、現代の忙がしい基督者たちにとつて頗る好ましい注意であらう。

聖餐に關する聖書の全體的教訓は、最近の種々なる書物に於て嶄新綿密なる研究の對象となつてゐる。その細部に於て必ずしも一致しないが、マーレー氏の説に全幅の共鳴を覺えてゐる譯者が物した最近の一書がある。書名は、

「聖餐——その起源、性質、使用に關する聖書的説明」(エチンバラのテイ・

アンド・テイ・クラーク出版)

である。

西曆一千八百九十七年九月

アープロースに於て

ジエイ・ビー・エル

序

この小著の使用に當り、私の思つてゐる二つの點を申し上げ度いと思ふ。

第一は次の如くである。この書を役立たせたいと思ふ方々は、たゞ讀んで、その日の部分を了解するといふにとどめずして、それに就いて黙想し、またそれを我が物としていたゞき度い。私の確信するところでは、人々が恩恵の裡に充分の成長を遂げないのは、秘れたるところに於て主と語る時間を持たないことに在る。若し個人的黙想によつてそれが眞に自分のものになる時間を持つのでなければ、たゞ讀んだことを理解し、心からそれに承服し、それを享け容れたところで、それらはすぐに消滅し、忘却されてしまふ。信者たちよ、どうか己を捧げて、神がその貴き思想をあなた方の内なる心靈的生命に傳達したまふやうな時間を神に捧げるやうにせよ。一章讀んだならば、須くみづからを沈黙のうちに神の前に置け。

そしてその御言が、あなた方の靈魂のなかに生き、力強く働く迄、忍んで神の御前に在れ！

この事は私が言ひ度いと思ふ第二の點に導く。即ち、どうか近頃盛んに出て來る多くの書物によつて神の御言から遠ざかることがないやうにといふ事である。これらの書物は次の如き結果を與へる。——若し讀者が、著者が教ふるところにのみ教訓を求めらば、その人は何事をもみな間接に攝收することになつてしまふ。これらの書物が讀者にとつて利益になる場合は、それらが、常に讀者を正しく取扱はれてゐる神の御言の部分に導くときに於てのみであつて、かゝる場合、讀者は自分自身それについて默想し、且つ、それを神の御口より出づるものとして受け入れることが出来るのである。信者たちよ、神の御言には測るべからざる能力がある。そこに潛みかくされてゐる祝福は思ふに優るものである。ある部分を読み終つたならば、常に、それについての説明が與へられてゐるところの聖書の句へ、心して歸るやうに。それを人間の言葉とはせず、眞實そうである如くに

信する者たちには力強く働くところの、神の御言として受け入れよ。御言を通して神との交際をつゞけよ。ゆつくりと、これについて神と語り、これに關して神に答ふところあれ！ さすれば主イエスの仰せられた御言の意味がよく了解されるであらう。「わが汝らに語りし言は、靈なり生命なり」かくして御言と聖靈とは互に働いて、あなた方をして祈禱に、而して、神の生命に、成長せしめるであらう。

著者が讀者諸君のために祈るところは、どうか、永遠の神が、この小著を祝福し、その子らをして、御言を學ばしめ給ふことである。

アンドリユー・マーレー

目次

第一部

聖餐前の週

(一)	安息日	聖なる招待	一九
(二)	月曜日	準備	二五
(三)	火曜日	接待者	三一
(四)	水曜日	自己吟味	三八
(五)	木曜日	罪の告白	四七
(六)	金曜日	信仰	五四
(七)	土曜日	自己服従	六一
	聖靈を求むる祈禱		六八

第二部

聖餐の主日

主日の朝——信仰の實踐

- (一) 取りて食へ …… 八三
- (二) わが記念として …… 八八
- (三) わが血 …… 九三
- (四) 新しい契約 …… 九七
- (五) 罪の赦を得させんとて …… 一〇二
- (六) 多くの人のために …… 一〇六
- (七) 汝らのために …… 一一〇
- (八) 一體 …… 一一四
- (九) 祝の酒杯 …… 一一八
- (十) 來り給ふ時まで …… 一二二

第三部

聖餐後の週

聖三位一體の神に對する感謝の祈禱

- (一) 月曜日——食物の能力 …… 一三三
- (二) 火曜日——聖潔 …… 一三八
- (三) 水曜日——從順 …… 一四五
- (四) 木曜日——勤勞 …… 一五一
- (五) 金曜日——イエスとの交際 …… 一五六
- (六) 土曜日——終局 …… 一六二
- 追加 …… 一六七

第一部 聖餐前の週



Table with multiple columns listing page numbers and chapter titles, including entries like (一) 聖餐の意義, (二) 聖餐の準備, etc.



わが神よ、なんぢの聖卓はひろげらるゝや？

なんぢの杯は愛をもて溢るゝや？

なんぢの子らをしてすべてそこに行かしめよ、

而してそのうまし味を味ははしめよ。

イエスのつくり給ひし聖き宴を頌めよ！

そは主の肉と血との豊なる饗宴ぞ！

こゝに來て、聖き泉と天なる糧とを

分たるものぞ幸ひなる！

主の聖卓こそあがめらる可けれ！

而して樂しき客人によりて充たされよ、

こゝにその聖き保證を味ひ得て

各々のたましひは救ひを見む。

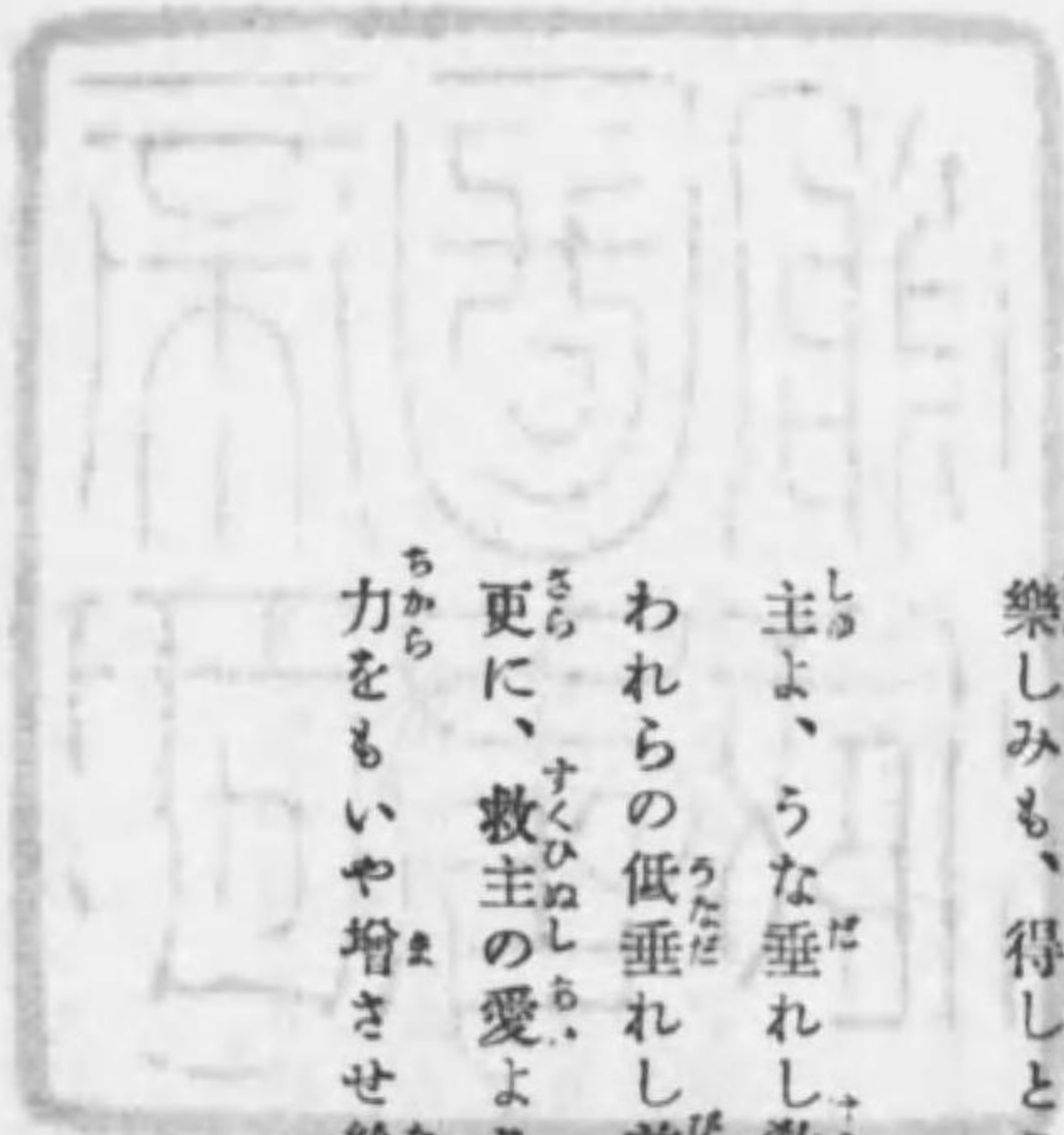


聖き宴の歌

もろ人をして準備されたる心もて近よらしめよ。
もろ人をして愛に燃えし心もて集らしめよ、
しからざれば、われら御父の食卓を去らんと
樂しみも、得しところも、ともに失せむ。

主よ、うな垂れし教會を奮起せしめたまへ、
われらの低垂れし美質を活かさしめたまへ。
更に、救主の愛より與へ給ふ
力をもいや増させ給へ。

フィリップ・ドッドリツヂ



安息日朝

聖なる招待

「視よ、晝餐は既に備りたり。凡ての物備りたれば、婚筵に來れ。」

(マタイ傳二十二章四節)

天地の王をして、あなた方にかく言はしめよ。その御子のほまれのために、主
は大なる晩餐をととのへられたと。そこには人性をとりたまうた御子が在す。そ
こには、父なる神にとつて親しく、また貴き、凡ての人の子らがある。神は彼等を
この聖なる愛の大なる饗宴に招かるゝやうになしたまうたのである。主は彼等を
客人とし、友として、そこに招するやう準備されてゐる。主は彼等を天の糧をも
つて養ひたまふ。主は永遠の生命の賜物と精力とを彼等に與へ給ふ。

わがたましひよ、なんぢも亦かゝる天來の招待を受けた。即ち榮光の王とともに食することを求められてゐる。この光榮に浴し、それに應ずることは、ふさはしいことであらうか。なんぢがこの饗宴のために準備することは如何に大切であらうか。また風采・服装・舉指・言語に於て、なんぢが、王の王の宮廷に招かれたものに當然豫期さるべき凡てのものを整へるといふことは、如何にのぞましい事であらうか。

榮光ある招待！ 私は饗宴のこと、それから如何にそれを準備するために偉大なる神が御心を碎き給うたかを想ふ。天使たちのために食を見出すといふのならば、一言以て足れりとする。しかし乍らこの呪はれたる地に於て人間のために天的食物的饗應をするとなると、これこそ神をわすらわしまつることが大きい。呪咀を取り去り、人間たちに天的祝福に對する權利と接近とを與へるためには、御子の生命と血潮より外にはない。迷つた人間たちに生命を與へるものは、神の御子の肉體と血とに外ならない。さればわがたましひよ、この王の饗宴の不

思議を考へて見よ。

私は招待について考へる。それは飽く迄も自由で、またあく迄も廣く「金なく價なき」ものに對してである。極貧のものも、全く見苦しいものでも招ぜられてゐる。しかしその招待は熱心で懇切を極めたものである。それに劣らず、人々を招く愛も懇ろである。その愛は罪人たちを探し求め、彼等を招き、彼らを祝福することを喜ぶのである。

私はまたこの饗宴に於ける祝福のことを考へる。死する者は天的生命の能力によつて養はれ、失はれたる者は父の家に於て彼等の位置を恢復する。神を慕ひ喘ぐものは神御自身とその愛とに満足する。

輝かしき招待よ！ 讚頌を以て私はこれを拜領し、それを有用ならしめんために心構へをする。我等は事故あるとの故を以て、種々な口實をつける人々について讀んだ事がある。一つは商用で、他は仕事で、もう一人は家庭の幸福によつてであつた。すると聲あつて次の如く言ふのを聞く。「われ汝らに告ぐ、かの招き

おきたる者のうち一人だに我が夕餐を味ひ得る者なし」。われらをかくも懇に招き給ふ方が聖なる方であつて、御自身が嘲弄されることに堪へ給ふことが出来ない方であるといふ確信のもとに、我等はあらゆる無思慮を除き、俗世の誘惑から己が身を退けようと思ふ。そして熱心を以て天上的の愛の御聲に對して従順であることを誓ひたいと思ふ。私は神の子らと共に、しづかな黙想のうちに居たい。そして俗世からの不必要な心配から解放され、また招かれたる客人として、眞の飢餓と静かな喜びとで神に面接したいものである。彼御自身がこの働きに於て、その援助を私に對して差し控へ給ふやうなことはないであらう。

祈 禱

永遠の神よ、我も亦御子の聖卓にあづかり得る餘地ありとの喜びの音信を受くることを得たり。恵みゆたかなる神よ。われ感謝を以て汝の招きをうく。主よ、我は汝のパンを渴望す。わが靈魂は神をぞ慕ふ。わが肉もわが心も切に活ける神

に向ひて叫ぶ。われ何時の日か、神のみかほの前にたち現るゝことを得べきや？

主よ、今週は準備の方法に於て眞の祝福を我に與へ給はんことを。冀はくは、われ罪深き姿は、われを全く卑下せしめ、わが裡にあるあらゆる希望の我より取り去られんことを。願はくは汝の恩恵の現れがわれを勵まし、確信と歡喜とをもて我を充たさんことを。主みづからわが裡に花婿―即ち貴きイエスに對する力強き要求を喚起し給はんことを。彼なくしては祝宴はあり得ざるなり。特に今週われに現さるべき事は、我は神のひとり子、愛せらるゝ御子と共に、わが神の御住居に於てパンを食する宴會への招待状を受け取りたる一事なり。主よ、イエスの聖名によりてこの祈禱を受け容れ給へ。

主イエスよ、なんぢは「神は靈なれば、靈とまこととをもて拜すべし」と教へ給ふ。主よ、心靈的禮拜を我等はもたらし得ず、さり乍ら主はわれらにその聖靈を與へ給ふ。願はくは、聖靈の働きを與へ給へ。聖餐の祝福は高き心靈的祝福にこそあれ、見えざる神はその時、我等にいと近く在し、それに對し精神的資格あ

るものに對しては永遠の生命の賜物を願ち與へ給ふ。たゞ靈的の心意のものゝみが、靈的の祝福を樂しむを得べし。汝はわがいかに充分なる祝福を受くるに缺けたるところあるかを知りたまふ。されど願はくは聖靈よ、今週は特別の能力を以て、我がうちに宿り、且つ働き給はんことを。われはこの目的のために自己を主とその祐導に承服せしめんとす、かくして主がわがうちに在りて、俗世の精神を克服し、神より新なる祝福をうけ繼がながためにわが内なる生命を更新せしめ給はんがためなり。主よ願はくは主の聖靈、わがうちにありて、力強く働かんことを。

而してわれ斯く己のために祈るとともに、全會衆のためにも祈るなり。願はくは凡て汝の子等のために聖靈を溢るゝ計りに與へ給へ。そは聖餐がわれら凡ての者に對して、われらの精神の恢復更新の時たることを得んがためなり。アーメン。

月曜日朝

準備

「過越の食をなし給ふために、我らが何處に往きて備ふことを望み給ふか。」

「然らば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に我らのために備へよ。」

(マルコ傳十四章十二、十五節)

「汝もし彼にむかひて汝の心を定むれば、汝の手を舒べよ。」(ヨブ記十一章十三節)

人が従事する仕事が大きければ大きい程、重要なものは準備である。過越の祭りの四日前からイスラエル人たちは準備をしたものだ。主イエスも亦、二階座敷が設けられて、そこで過越の祭が準備されることを望んで居られた。私が神に會ひまつるやうに召される時、そして主の聖卓に列なるやうに召される時、準備無し

に近づきまづるべきでないといふことを知るであらう。そうでなければ、主をけがしまつる事となり、自分に與へられた祝福を失ふことになる。そして私の靈魂を重い罪で覆ふことになるであらう。

一體正しい準備には二つの事が必要である。その第一は次の如くである。――先づ我等の心が我等を招き給ふ主に領盡せられることであり、また彼が我等に與へ給ふ榮光ある祝福に充たされることである。イエスに關する大なる思想と、彼の愛が爲すところの事に對する大なる期待とは、心を燃し、主に會ふための最良の準備になるのである。

第二の準備は、果して我等が主の饗宴に招かれ、且つ受け入れられるほどに立派な客人であるかどうかを自省して見ることである。即ち果して我等が招待された客人として、その嘉し給ふやうな動作によつて食卓に列するやうに準備してゐるかどうかといふ事なのである。己を卑下することに慣ひ、自己より何等の期待を持たず、また己がうちに何等の善きところをも見出すことなく、自己を全く否

定することとなり、かくしてイエスのみを通して生きんとする事――これこそ喜ばしき聖餐の拜領にまで導くところの靈魂の態度である。

人間は時間を考へなくては何事をも贏ち得ることは出来ない。たとへ寛大なる恩恵がわれらの働きに關係無くその働きを爲すところに於ても、少なくとも、その業が我等の心のなかに行はれるには時間を要する。我等が饗宴のために準備するのは、我等が、潜かに、己が願が、心の裡に働いて來る迄もイエスを仰ぐ決心をする時に於てのみ、始めて我等は饗應の求めに心備へをしたと言へるのである。我等が主の聖卓での主との公の交際より絶大の祝福を受け得るのは、かくれたる、毎日の生活の不斷の交通に於て信頼を以て主に對してゐる時に於てのみである。我等は聖卓を見るときにのみ飢餓と渴きを覺えるわけではない。それらがほんとうに感ぜられるのは、それに先立つ生活の戦のうちに於てである。かかる人々に對してのみ、聖卓は饗應であり得るのだ。かく渴望を呼びさまされること、準備のうちに缺けることが無いように。

しかし、悲しい哉、食卓に食物の用意をすることが殆ど我等の働きでない如くに、この饗應に對する賓客として自己を準備する位置にも居ないのである。「凡てのもの備はる」と宣うた主は、結婚の晴着をも準備し給うたのである。主御自身が客人に晴着を着せ給ひ、且つ饗應のために充分の準備を爲し給ふ。故に我等はこの事をも主にお願ひしよう。我らが何處に往きて備ふることを望み給ふかと弟子たちがたづねたのは主に對してであつた。彼に對して我等もまた求めていであらう。「主よ、わが過越を準備することを如何が思ひ給ふや」。今週は、我等の眼と心とを主に注ぎつゝ、御膝下に於て、靜かな黙想と祈禱とをつゞけよう。たしかにこの祭をことほぐために必要であるものを見出すことが出来るであらう。

祈 禱

主よ、主の聖卓に近づく時、あらゆる輕率と浮薄とよりわれを救ひ給へ。屢々

われらは聖餐にあづかる事は當然なりと考ふ。主御自身來りてその道を用意し、その道筋を直ぐ爲給ふ時、その道より石を取り除くことの如何に大切なるかを、われらは殆ど考ふる能はず。われらは祝福を受けることを甚だ輕きものゝ如くに考へきたれり。主よ、ねがはくはこの誤謬をゆるしたまへ。罪人が神と交はるとき、それが如何なる事を意味するかを、われらのたましいをして了解する事を得しめ給へ。願はくは主御自身われらのうちに働き給うて、あらゆる罪を摘發し、それを刈除せんとする熱心と自覺とを興へ給はんことを、かくして全心全靈及びそのあらゆる能力の承服を以て、己を主に委ねまつることを得させ給へ。

主イエスよ、わがこの祈願を聞き給はんことを。おゝ主よ、願はくは無思慮・怠慢によりて祝福を失ふことなからしめ給へ。おゝ主よ、わがために聖卓を準備し給ふことは、如何に勞多きことぞ。而も、そのみにては今や充分ならず、われは更に聖卓のためにわれを準備し給はんことを祈らざるべからず。されど、われはいま、汝がそを爲し給ふことに關するよろこばしき確信を持ち得るが故に、

主に感謝したてまつる。かゝるが故に今週は聖手のうちに己を委ねたてまつる。そはわが裡に働き給ふ主が、靈魂の正しき状態を實現せしめ給はんがためなり。貴き主よ、われに碎けたる悔し心を與へ給へ。而してわが友として、救主として、わが凡てなる主を活ける信仰をもつて仰ぐことを得しめたまへ。主イエスよ、われをしてかく言はしめ給へ。われは一つの思念、一つの願望より持たずと言はしめ給へ、而して「そはイエスなり」と言はしめたまへ。かくして、汝は爾と爾の驚くべき愛の外、何物をも願はずとのわがよろこばしき告白によりて汝をあげめまつり、自己が父なる神の榮光のために準備さるゝことを得しめ給へ。

救主よ、今週中たゞ爾に縋りたてまつる。願はくは、我がうちに聖餐への眞の準備をつくり給はんことを。主よりそを期待し奉つる。アーメン。

火曜日朝

接待者

「斯て彼らに言ひ給ふ『われ苦難の前に、なんぢらと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり。』」(ルカ傳二十二章十五節)

「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もし我が聲を聞いて戸を開かば、我その内に入りて彼とともに食し、彼もまた我とともに食せん」(黙示録三章二十節)

最良の準備はイエスの心を深く視ることである。あなた方が王座に位し給ふ彼が如何にあなた方を求めて居られるか、あなた方を待つて居られるか、また、あなた方のために準備して居られるか、分つた時、如何にしても、あなた方の願望を行動に移し、正しい準備があなた方に於てなされるやうにする外なくなるでは

ないか。

躰越の食卓に於けるイエスの御言は我等をして彼の心を深く洞察せしめる。主はその聖卓よりして直ぐに十字架に行かなければならぬ事を知つて居られた。彼は御自身が眞の躰越となられるためには身體は裂かれ、血は流されなければならぬことを御存じであつた。主はその夜、彼等が歎きつゝも、彼を裏切ることを知り給うた。しかも彼は言はれた。「なんぢらと共にこの過越の食をなすことを望みに望みたり」。——何たる愛であらうぞ！ 而もイエスは今も渝り給はない。憐れむべき罪人よ、あなたに對しても同じである。主は熱心に躰越の食をとらんことをのぞみ給ふ。しかり、天の王座に在す主は、聖餐の日を待ちのぞみ、あなた方と共に食し、あなた方を力づけることを望み給ふ。人よ、あなた方の怠慢はあなた方を恥しめるであらう。イエスは熱心にあなた方と共に晩餐をとることのぞみ給ふ。主はこの天上的生命の食物を獨りで樂しまうとはなさらぬ。切にあなた方と共に食することを望み給ふ。

若しくは我等は次のやうな言葉で言はれてゐるやうにも考へることが出来ると思ふ。靈魂と共に聖餐を守るために、「主は戸の外に立ちて叩き給ふ」。驚くべき謙讓ではないか！ 天の王がその傍に坐せんと望み給ふのは、果してこの罪深き者のうちに何があるからであらうか。我等の心のうちに、聖餐を守り給ふために、イエスは戸の外に立ちて叩き給ふ。これこそ測るべからざる愛ではないか？ 言ふべからざる祝福ではないか？

主はどうかして自から來臨しようと望んで居られる。主の臨在こそ格別の饗應の歡喜である。主御自身が我等に食物を手渡し、我等をして彼が齋し給うた天上的の食物の分與者たらしめ給ふ。食べ方を知らない小さく・か弱い幼児が、母の手によつて哺まれるごとくに、イエスは天の麴麴を我等のために割き、我等が求めるものを與へ給ふ。

かくして輝かしき躰越の食がイエスと共に饗せられた。それこそイエスとともにする輝かしい晩餐である。主は接待者である。また盛裝それ自身であり、食物

それ自身ですらあり給ふ。彼は私の要するものを判然と知り給ふ。彼はこれまで私を妨げて居たものをもよく知つて居給ふ。而してイエスの愛はその聖卓に於て、わが飢を醫すことの出来る只一つのものを與へるために臨在されるのである。主イエスよ、主は私と共に踰越を守らうと熱心にお望みになつてゐるのですか？ 私は敢へて答へたい。私もまた熱心に主とともに聖餐を守りたいと願つてゐると。私の全靈はイエスと共に聖餐にあづかることを冀つてゐると。

世に自分が望まれ、愛されてゐるといふ思念以上に力強く、愛を喚びさまし、活動せしめるものはないのである。自分か神の御子にとつて望みの對象であるといふことを本當に認識するよう務め度いものである。主は私が彼のところへ行かどろか心を留めて見て居られる。深甚の興味を以て、主は、果して私が彼を求めて来るかを知らんとし給ふ。而して、その豊かな祝福を私に與へんとし給ふのである。これこそ主の愛にとつて大なる喜びであるのだ。「なんぢの口をひろくあけよ。われ物をみたましめん」(詩篇八十一篇十節)。かくして、主は我の

うちに、熱心なる願望を呼び起さしめ給ふ。主の望みは我に對して在るのである。わがたましひよ、この驚くべき思想について、信じ且つ考へ見よ。かくしてあなた方に對する主の御望みの協はんがために、壓倒的な力を以てイエスに己を捧げざるを得ないやうに感ずる迄に到れ。かくてあなた方も亦充たされるであらう。

祈 禱

永遠の愛よ！ 我は如何なる者なれば、爾われと共に食せんとし給ふや？ 主よ、主が熱心にわれと共に食することを望み給ふことこそ大なる恩恵なれ！ 我は爾と共に食することを願ふことうすく、むしろ、亡びゆく食物をより多く求め主と主の與へ給ふパンよりも、この世の交際をより多く求むるものなるを！ 主よ、願はくは、かゝる我とさへ共に食せんことを望み給ふ主の御心にある御希望を感ずることを得しめ給へ！ かくして、わが遅鈍と不信とが辱かしめられ、わが衷なる凡てのものが、悉くわがこころ爾に向ひて開かるゝよう備へすることを

得しめたまへ。

主よ、あまりにも長く我は主を戸ぼそに立ちて扉を叩き給ふまゝになしぬ。今やそを主に向ひて開きなむ。願はくは、わが心を、よく整へられたる祝宴の席となし、かくして、主がそこにて踰越の節會を準備さるゝよう爲させ給はんことを！わがために注がれたる爾の血潮を見る事が、わがために、充分なる贖罪の確證たることを得しめたまへ。神の小羊を食することによりて、我をして天上的生命の能力に充たさるゝことを得しめ給へ！ 爾とともに食することが、爾御自身との交際にて在らしめ給へ。而して爾の愛がわがたましひの歡喜たることを得しめたまへ。尊き主よ！ 爾を我に近づけ給ひたる爾のみこゝろの愛が、我をも主に近づけ給はん事を！

救主よ！ 我はこの事を主の御手に頼りたてまつる。爾をしてかくも我を求め給ふに到らしめたる爾のみこゝろのうちなる愛を我に示し給へ！ 主よこれぞ、主のしたしき友等のために残されたる神秘の事の一つたることを識る。而も我は

それらの者の中に數へらるゝに堪へざるものなり。されど主よ、烏澁がましくも、我をしてかく爲す事を許し給ふや！ 願はくは主よ、今一度、主のみこゝろを識ることを得しめ給へ！ 而していかに主がわれと共に熱心に食せんことを願ひ給ふかを知らしめ給へ！ かゝる大なる願望を抱きて、聖卓につらなることの如何なるよろこびなるかを心に描くことを得しめ給へ！ 爾は我を爾の所有と爲さんとし給ふ。爾は我と深甚の交際に入らんことを望み給ふ。爾は我と交はることをのぞみ給ふ。爾は我と一つならんことを求め給ふ。爾は我を爾のために得んとしたまふなり。イエスよ、この事が眞實ならば、願はくは、我をしてそれを痛感せしめ給へ！ わがたましひをして、闇黒に残さるゝことなからしめ給へ！ かくしてわれは他のあらゆる物より離れ去りて、わが生活は、たゞわれらの王、われらの友なるイエスと共に食するといふ高き願望をもて充たさるゝに到らなむ。貴きイエスよ、かくあることを得しめ給はんことを、アーメン。

水曜日朝

自己吟味

「人みづから省みて後、そのパンを食し、その酒杯をのむべし。」(コリント前書十一章廿八節)

「なんぢら信仰に居るや否や、自ら試み、自ら驗しみよ。汝等みづから知らざらんや、若し棄てらるゝ者ならずば、イエス・キリストの汝らの中に在す事を。」(コリント後書十三章五節)

誰しも自己吟味なくしてパンをいたゞかうとはしないであらう。「宜しきに適はざる交際」の危険は非常に大きい。「主の體と血とを犯す」罪は重大である。自ら審判を招く可能性また恐るべきものがある(コリント前書十一章二十七)

三十節)。眞に聖卓に於て祝福を求める人は、「なんぢみづからを省みよ」、「なんぢみづからを驗せ」との主の御命令に服従するであらう。

自己吟味の問題は簡單である。使徒によれば、そこには二つの條件がある計りである。——イエス・キリスト、なんぢのうちに在すか、それともなんぢは棄てられてゐるか、いづれか一つである。そこには第三の條件はない。あなた方のうちのキリストの生命は弱いかも知れない。しかし乍らあなた方が眞に再生してゐるならば、そして神の子となつてゐるならば、キリストはあなた方のうちに在すのである。かくて子供の如く父の聖卓に招かれ、子供としてパンを頌たれるのである。

しかし乍ら、若しキリストがあなた方のうちに在さないならば、あなた方は棄てられてゐるのである。あなた方のうちにあるもの、あなた方の爲すこと、あなたの姿、あなた方が願ふこと、望むこと、一つとして神に享け容れられるものはない。あなた方が罪を犯してゐる神は、たゞ一つの事だけを求めて居られる。そ

れはあなた方が御子を享け容れるかどうかといふことである。「御子を持つものは、生命を持つ」のである。神はこれ以下のことで満足し給はない。この事のみによつて全く満足される。若しキリストがあなた方のうちに在すならば、あなた方は神に享け容れるのである。若しキリストがあなた方の裡に在さないならば、その瞬間あなた方は棄てられるのである。あなた方が婚禮の晴着をつけずして、聖餐に来るならば、あなた方の運命は外の闇黒に抛り出されることだ。あなた方はその資格がない。あなた方は自分自身に審判をうけなければならぬ。あなた方は「主の體と血とを犯す」ことになるのである。

讀者よ、あなた方の場合はどうであるか？ 聖卓に於て主があなた方を見給ふ時、神は何と仰せられるであらうか？ 主があなた方を主の聖卓に心から迎へられてゐる子供たちの一人と見給ふであらうか。それとも、聖卓に侍る資格のない闖入者と見給ふであらうか？ 若しもあなた方が其人から迎へられて居ないことが分つた時、またその人があなた方を見度いと思はない時、あなた方は一刻なり

とも、その人の食卓に座ることを潔しとしないであらう。それと同じく、主が猶ほ怒りを以てあなた方を御覽になつてゐる場合、たしかに主の御命令を汚したもゝとして御覽になつて居るやうな場合、夢にも神の聖卓に侍ることなど考へない筈だ。讀者よ、この問題に答へていたゞき度い。神はあなた方が聖卓に侍るのを見給ふ時、なんと仰せられるであらうか？ 然し乍ら、若しもあなた方が神の子供である場合は、どんなに弱くても、聖卓に侍つて父のパンを食する特權があるのだ。しかし、若しあなた方が、神の子供でなく、即ち眞の信者でないならば、聖餐にあづかる資格は無いのである。そこへ進み出で、はならないのである。

讀者よ！ 自分自身を驗し見よ。眞劍にあなた方が信仰してゐるかどうかを！ 所してみづからを驗して見るがよい。そして若し未だキリストを享けてないことが分れば、たつた今キリストを享け容れよ！ まだ時がある。躊躇することなくして己をキリストに委ねよ。彼に在りてあなた方は主の聖卓につらなる特權を持つてゐるのだ。

神よ、わが心を探りわが心を知り給へ。わが思念を試み、また知り給へ。而して若しわがうちに愚なる傾向あらば、われをとこしへの道に導き給へ。主よ、主は何物にも増して、心があざむかれ易きものなる事を知り給ふ。されど主は我が心をすら知り給ふ。全能の唯一なる神よ、われいま爾に到る、而して祈りを以てわが心を爾の前に置く。主よ、願はくは我をしてキリスト我が裡に在し給ふか否かをしらしめ給へ。また今なほ主なくして生き、而して爾に捨てられるや否やをしらしめ給へ。

その昔につきて稽ふるに、主は、偽善者が民の真中より放逐さるべき事を警告し給ひたり。主はアカンを指摘し給へり。また、御子と共に皿に手を按く者をも知らしめ給へり。またアナニアをも觀破し給へり。爾は食卓に列せる客人たちを精査するために入御さるゝ王者にて在す。而して言ひ給ふ。「友よ、如何なれば

禮服をつけずして此處に入りたるか？」と。主は今猶ほ力めて心を探究し給ふ。主よ、願はくは御民の祈求を聴き、會衆を淨め給へ。願はくは聖靈の御働き強くして、あらゆる疑惑を一掃し、爾の子等をしてキリスト彼等のうちに在りと告白せしめ給へ。願はくは彼らの真中に於ける主の臨在が大なる歡喜となり敬虔となりて、單に舌をもて告白する者達をして畏怖を抱かしめ、己を義とする者をして露顯に及ばしめたまへ。主よ、今猶ほ不明のうちに安んずる人々をして、キリスト彼等のうちに在るか、又は彼等は棄てられ居るかを識らしめ給はんことを。大なる神よ！ 我にこのことを教へ給へ、イエス・キリスト我が裏に在るか？ 願はくは聖靈をしてこの尊き確證を我に與へさせ給へ。かくて我は爾の子として確信を以て聖卓に列するを得ん！

而して若しイエス・キリスト我が裡に在ざりしならんには、而して我猶ほキリストなくして生き、爾に捨てられ居らんには、憐憫ある主よ、この事を我に明らかに示し給へ。われをしてこの事を知る心を與へ、イエス・キリストわが裡に

在し給ふにあらすしては、聖卓に近づくことなからしめ給へ。主よ、われは今、わが心をイエスの前に開き、救主として彼をうけ容れんがために御許に来れるなり。アーメン。

祈 禱

(イエス・キリスト、彼の裏に在さざる事を發見せる者のための祈禱)

主なる神よ、われは聖卓に進まんと思ひたり、義務感は我に迫り、われは聖餐の時のために己の備へをなさんとしたり。しかるに、視よ、主のみことばは我を畏れしめぬ。曰く、若しイエス・キリストわが裏に在さざるならば、我は棄てられたるものなり。

主よ、我をあはれみ給へ。われは、婚儀の晴衣をつけずして聖卓に列せんとせしことを知りたり。爾は聖卓の主にて在す。主のみことばは行はれざるべからず。爾は聖き神にて在す。爾は罪より己を洗ひ、キリストの義を着ることなき罪人と

俱に坐して食ふことを好み給はず。主よ、われは今猶ほ結婚の晴衣を着け居らざるかを恐る。わが罪はわれを許すことなかるべし。主よ、われをあはれみ給へ。われは主の聖卓に行かじ、子等のためのパンは我がものならず。

我は進み行くことをせじ。されど、主よ、われは離れ去ることをもせじ。イエスとかゝわりなく、彼の友情を頌ち持たず、高きに在す神の小羊の婚筵に列なるを得ざること——かくの如きがわが運命にしあれば、禍ひなる哉！主よ、われを憐みて、能ふべくんば、われに、主の聖卓に侍するためわが願ふところのものを與へ給はんことを。

主なる神よ、われは主の憐憫深く在すことを聞きたり、神は價なくして婚禮の晴衣を與へ給ふ。而して極悪の罪人をも赦し給ふ。眞にわが裏にイエス・キリストなくして、われはあまりにも長く安んじ居たりしよ！主よ、いまわれ御前に到る。爾の御前にわれは大なるわが不義を置くなり。われは全く罪の勢力のもとにあり、己を如何ともする能はざるなり。主よ、主のみわれを助くることを爲し

能ふ。爾はこれを爲すを好み給はん。願はくは我を受け容れ給へ、今われ主の御前に己をひれ伏さしむるなり。われは主に己を捧げまつる。この日イエスの血を洗ひ給はんことを。

我がために父より與へられし主イエスよ、われ爾を享けまつる。われ爾を救主として享けまつる。われは爾が我がための主にて在すことを信ず。今われわが心を爾にさぐぐ——わが貧しく罪深き心にしあれども……。願はくは來りてその衷に住み給へ。而してイエス、キリストわが衷に在すことをしらしめ給へ。

わが神よ、わがたましひは爾に向ひて叫び、爾を求む。願はくは眞にイエスを願ち與へらるゝものたらしめ給へ。アーメン。

木曜日朝

罪の告白

「我みづから不義をいひあらはし、わが罪のためになしめばなり。」（詩篇三十八篇十八節）

「我の愆われの罪いくばくなるや、我の背反と罪とを我に知らしめ給へ。」（ヨブ記十章二十三節）

「幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」（マタイ傳五章四節）

われらの規定にはかく言つてある「先づ始めに、誰もが己の心を精査しなければならぬ。果して自分が罪のために嘆いてゐるか、また神の前に己を虚しくしてゐるか。これが眞實の自己検討の第一要素である。これは他に途がないの

である。主イエスの救は罪からの救である。イエスの能力、恩恵、そして祝福は、我らから罪を取り去り、それに天の生命と聖とを植え付けるところに現れてゐる。新しく、深い罪悪意識が、聖餐を受ける前に當つて必要であるのは、聖餐がキリストの生命の新たななる、そして、増し加はつて来る分與として行はれるものであるからである。罪を考へまた告白しなければならぬのは、今猶ほ赦免を求めつつある者のみではない。今も猶ほ神に向つて犯し、逆きつゝあるところの罪を熱心にまた正しく認識する必要がある者は、むしろ信者である。自己を否定すればする程、キリストは彼の眼に榮光ある存在となつて行く。己が罪を痛感すればする程、イエスは益々彼に願はしいものとなつて来る。あらゆる罪悪はイエスを喚びまつるべき必要そのものである。罪の告白によつて、あなた方はイエスに己が傷ついた箇所をお見せする事になる。そして主が御血の癒しの能力を現し給ふ場所をお見せすることになるのである。あなた方が告白するあらゆる罪悪は、イエスが放逐し給ふべきあるものを認むることであり、イエスがその聖なるよろこば

しい賜物の一つで充たし給ふ場所を認めることである。あなた方が告白するあらゆる罪悪はあなた方が更に信じ求めなければならぬ新しい理由であり、またイエスがあなた方を祝福さるべき新しい理由になるのである。

基督者よ、己が罪を思ふことによつて、聖餐に對して準備しなければならぬ。イエスの前にその目録をあげることを恐れてはならない。主があなた方のうちに於て改め給ふことを希望する諸點を指摘せよ。告白されざる罪はまた克服されざる罪である。救はれたる靈魂がイエスに到つて彼とともに罪について語り合ひ、それを彼に知らしめる時、その事は罪の力を打ち破り、彼をしてます／＼尊からしめるものである。あなた方をして罪の呪咀を更に深刻に感ぜしめるその光は、また、あなた方をして、罪に對する完全に終局的な勝利を識別することを得せしめる。全く失はれたる體驗は、全く贖はれる體驗への途を準備するものである。

神に愛せらるゝ子供たちよ！ あなた方は深い罪悪意識が如何に祝福の源泉に

なつてゐるかを知らぬ。それを恐れてはならない。それを避けてもいけない。神の尊き聖靈はそれをあなた方に與へ給ふ。あなた方のうちにあるイエスの増し加はる恩恵によつて、また天^{てん}上の生活に於けるあなた方の更に深い交際によつて、主はあなた方の靈魂の如何ともし難い罪悪性を發見されるであらう。而してこの體驗はあなた方をして聖餐のうちに封じ込まれてゐるイエスへの完全な承服へと導くであらう。

祈 禱

主なる神よ、主は我を探り、われを知り給ふ。爾は心を知り、それを支配せんとし給ふ。主の御前に顯はさるゝことなき存在はなし。われらにかゝわりを持つ主の眼には、萬物は悉く赤裸々に露はさるゝなり。爾の眼は、不義の心、義しき心を、均しく洞察したまふなり。なんぢは全能の存在者にして、心の探究者にて在すなり。

主よ！ 主の全知はその敵に對して如何に脅威なるべきぞ！ 火焰の如く天に燃ゆるその眼は常に彼らの上にとゞまる。かれらは如何にもして、そこより逃げ去らんとすれども能はず。されど爾の民等にとりては爾の全知こそ、慰安また庇護にこそあれ！ 爾こそはかれらを自我より救ひ、また己が心情的輕佻より救ひ出し給ふ存在にて在す。かれらは爾を招きて彼らのかくれたる過誤よりして彼らを淨めしめんとはするなり。

聖き神よ！ われまたみづからを主の聖手に委ぬ。神よ、われを探りて、わが心を識り給はんことを！ 畏怖によりて、また心の奥底よりして、われ主に向ひて叫ばん。——聖き神よ、われは一つの罪にも堪へ得ず。たとへそれが如何に深く根ざし居らんも。主よ、われ爾の助けを切に求む。われ爾のかゞやくまなざしの前に己を置く。その御前に罪人は立つことを得ず。おゝ神よ、われを探り、わが心をも知り給へ！

主よ、われはその答が屢々恐ろしきものなる事を知る。「われらが救の神よ、な

んぢは公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん」。われは知る、主、人をして誘惑に入らしめ、かれをしてその心のうちにあるものを見せしめ給ふ時、卑下・屈辱・悲哀は屢々深く、いたましましきものなるを！ 我はまた知る、爾がその能力ある御手を胸臆のうちに探り入れ給ひ、殆ど知られざる程に深く根ざしたる罪を剿絶し給はん時、血肉は極度に衰ふることを。而も我は猶ほ叫ばんとす。「神よ、ねがはくは我をさぐりて、わが心をしり給へ」と。

主よ、我の見る事を得ざる罪を我に知らしめたまへ。——特に他人がそれらについて語る時、我をさとしむる特別の罪につきて知らしめ給へ。或は誘惑を伴ふ愛錢癖にてもあれ、虚榮を伴ふ俗世に對する愛する事にてもあれ、混亂を伴ふ自我に對する愛にてもあれ、それらを我に知らしめ給はんことを！ 主よ、友にても敵にても、いづれをも用ひたまへ。おゝわが父よ、主の望み給ふ方法を用ひ給へ。たゞ我をさぐり、我が心をしり給へ。われをかくれたる疵より解き放ちたまへ。而してたましひを害ふ道のわれに宿ることなからしめたまへ。而してわ

れを永遠の道に導き給はんことを。

しかり、あはれみある主よ！ 願はくはわれにかゝる完き自己の天性の墮落に關する確信を與へ、充分にキリストの全き贖罪を強いて受くることを得しめ給へ。アーメン。

信仰

「汝の罪は赦されたり。」

「なんぢの信仰、なんぢを救へり、安らかに往け。」（ルカ傳七章四十八―五十節）

聖卓に於てイエスはその友を集めたまふ。而して父はその子らのためにのみ、子等のためのパンを分たんとして待ちたまふ。しかして聖卓はわれのためには回心の場所ならず、また贖罪の場所にもあらず。われらは、これらの祝福を孤獨のうちに求めなければならぬ。イエスは密室に於て、熱心と正確とをもつて發見されなければならぬ。聖卓は贖はれたる者たちにとつてはその主を告白すべき場所であり、信者にとつてはその信仰を強められる場所であり、その友にとつて

はその契約を新にすべき場所である。このことについて、われらの指導書は自己省察の第二の要素として、聖卓に行く前に、果して我等は眞に罪の赦しを信じてゐるかどうかを省みるべきことを教へてゐる。第二に、人はその凡ての罪がキリストの故に赦されたといふ神の確な約束を信じてゐるかどうかについて心を精査して見なければならぬ。靈魂が主に近づいてゐる確信を持ち、更に強められてゐる信仰の祝福を受ける事が出来るのは、罪の赦しに關する信仰によりてである。讀者よ！ あなた方は主の聖卓に侍ることになつてゐる。あなた方は罪の赦しをほんとうに信じてゐるのであるか？ その意味するところが分つてゐることゝ思ふ。赦免は心から罪をとり去ることではなく、聖潔の意味でもない。それはそれによつて心が到達すべき道の端緒に過ぎない。赦免は神があなた方が今まで爲してゐた罪をそれによつて赦免し給ふ解放の宣言である。まづ順序として赦免が先に來る。それにひきつゞいて聖潔が來り更生が來る。今のところこれこそあなた方の前に置かれた問題である。あなた方は罪の赦免を信じてゐるのであるか？

あなた方の罪が拭ひ去られたと信じてゐるか？

あなた方は信仰の何であるかを知る。それはたしかに一箇の感情であつて、人をして熱心に、その状態に於て専心せしめるところの或物を體驗することである。信仰は神とその御言のうちに憩ひ處を見出すために自己から脱却することを意味する。それで、罪の赦しに關する信仰は、あなた方の罪が赦されたといふこと、及び神が仰せられたことは、その如く實行されるといふ根據以外に立つてゐないといふ事の確信を意味する。従つてあなた方の罪赦されたりといふ信仰は、あなた方は、みな主の御言に頼つてゐるところの憫れむべき罪人ではあるが、主に近づき、主の書よりしてあなた方の罪が除去されたといふ確信に外ならない。あなた方はそれを知つてゐる。——神がそれを約束し給うたからである。

讀者よ！ あなた方は罪の赦しを信じてゐるのか？——「汝の罪キリストによりて拭ひ去られたり」といふことを信ずるのであるか。あなた方は指導書がそれについて言つてゐる人々のうちの一人であるか。「人々は己が凡ての罪赦され、

キリストの全き義が、彼の上に與へられ、彼を己が民の一人と認め給ふといふかかる神の約束を信じてゐるかどうかについて、よく心の中を精査して見なければならぬ」。しかし、神の御約束は自分自身がその身を以てあらゆる己が罪を贖ひ、凡ての義を充たしたかと思はれる程に完全である。

この事を信ずるものは幸福なる哉。あなた方は聖卓に近づく確信を得た。「主は豊に赦しを與へ給ふ」といふ言葉の眞理を信じ、良心を清むるイエス・キリストの能力を信じ、赦免の約束があなた方に對しても在るといふこと、そしてあなた方の罪が拭ひ去られ、あなた方の罪が最早記憶されないといふ事實に對する個人的な理解を以て信じなければならぬ。

基督者たちよ。この信仰を以て聖卓に近づけ！「わがたましひよ、エホバを讃めまつれ、エホバはすべての不義をゆるし給ふ」といふ聖語があなた方の讃歌であるやうに。聖靈に祈り求めて、あなた方の心のうちに赦免に對する信仰をますます確實に、力強く、よろこばしきものたらしめよ。しからは神は、まづ罪の赦

免を與へ給うた人々に對し、愛の生命と祝福と成長し行く能力とを準備し給ふかといふことを聖卓に於て體驗するであらう。

祈
禱

主なる神よ、われは聖卓に向ひて進むおのれを發見するものなり。われはそこに於てイエスが「こは新約の吾血にして罪を赦さんとて爾等のために流すところのものなり」と宣ふ時に、必ず與へ給ふものを受けんことを冀ふなり。主よ、われは此の日、新しき信仰の働きを以て、赦罪を分たるゝことを識り、かくして贖罪の歡喜のうちに聖餐に於て爾のものとして、爾に會はんことを冀ふ。

この目的のために、主よ、願はくは、イエスの御働きが全く充分にして、而も全く充足せるものなることの實證を與へ給はんことを。かくして、己の方としては、たゞ受け、受けてよろこぶほか、何事を爲す餘地もあまされざることを憶えしめたまへ。願はくは聖靈の御働きによりて、われも亦イエスにあづかり居るこ

とを新に心に知らしめたまへ。而して主よ、以前に増して明白なる信仰を以て、あらゆる豊にして榮光ある約束を伴ふ御子の完全なる贖罪を識ることを得しめたまへ。

主よ、われ爾に求む。願はくは、如何なる疑惑もこの祝福を我より奪ふことなからしめ給へ。我みづからを見る時、恐怖と呪咀の外に何物も無し。みづからの心を訊し見る時、何の望みも見出し得ず。されど我は主の御言を仰ぐ、そは我をしてかく叫ばしむ。「何の神か汝に如ん、汝は罪を赦し給ふ」(米迦書七章十八節)。この語は爾の親しき御子の十字架を我に指示す。御子は不義なる者のために生命を捐て且つかくのたまひたり。「イエス・キリストの血、すべての罪より我らを潔む」、「己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ我らの罪を赦し給ふ。」而してこの語は更に我等をしてかく言はしめる「汝に赦あり」。主よ、われこの御言に依り頼む。爾に赦あり。われ爾の前にわが罪を懺悔したり。われらはわがすべての罪をみまへに露はす。而してわれは、イエスの血の徳によ

りて、爾はわれを赦し給ふことを信ず。

わが神よ、この眞理を把握することを得しめたまへ。而してあらゆる罪を携へてまツしぐらにキリストの御血に到ることを得しめ給へ。願はくは、われをして新しき契約たる「われ汝の不義を憐み、汝の罪科を憶えじ」との大なる約束に對する確乎たる信仰を以て、よろこびて主の聖卓に侍べることを得しめ給へ。主なる神よ、主はかく宣ひたれば、我は信じまつるなり。アーメン。

土曜日朝

自己服従

「キリストの愛われらに迫れり。我ら思ふに、一人すべての人に代りて死にたれば、凡ての人すでに死にたるなり。その凡ての人に代りて死に給ひしは、生ける人の最早おのれの爲に生きず、己に代り死にて甦へり給ひし者のために生きん爲なり。」

(コリント後書五章十四、十五節)

「第三に、各人はその全生活を以て神に對し純粹なる感謝を現すことを意識し居るや否やを己が心に訊し見ざるべからず。」——かくの如く指導書は自己省察の第三の部分を構成するところのものを言ひ表はして居る。それは即ち、自己を神への活ける供物として捧げる意志ありや否やと言ふことなのであつて、しかも、

單なる物に於ては、全生活に於てかくすることを意味するのである。

これこそイエスが望み給ふところである。凡て贖はれたる靈魂とは、全く俗世をはなれて、たゞ神のために生き、神の意志・神の業・神の名譽のために生くる献身の士を意味するのである。これはまた眞の基督者が冀ふところである。彼はイエスの爲したまふ要求の公正を知り、イエスが、その血を以て贖ひたまうたところの御自身の所有としての信者に對して持ち給ふ完全特權をも、やはり認めるのである。これこそ眞の基督者たちが、心にそゝがれたるキリストの愛の能力に期待するところであり、また新しき生命の力に期待するところでもある。而してかゝる献身、かゝる全き服従は、信者が聖餐に於て特に告白し、また充足されるものなのである。

聖餐は犠牲の食事であつて、二重の意味がある。即ち、古き契約に於ては特殊の犠牲がある。――罪の捧げもの、燔祭、そして感謝の捧げものである。そのうち罪の捧げものは、贖罪によつて爲されるもので、キリストの犠牲の型である。

「彼は我がために罪となり給へり」。聖壇の前に火をもつて焼き盡さるゝ燔祭は、神への奉仕に對する全き忠實の象徴であり、キリストの犠牲にも通ひ、同時に己を主に服従せしめる信者たちの服従にも通ふのである（ロマ書十二章一節）。而して最後に、感謝の捧げ物の觀念は、更に充分に感謝の祭より來る交際についての關心を表して居る。

罪の捧物は贖罪によりて爲されるものであるが、それは贖罪を通して神との交際の表象として祭司達が食べたであらう。聖餐はとこしへに罪を亡し給うたところのイエス・キリストの全き犠牲に於けるわれらの交際である。神への献身が現される感謝の捧げ物に於ては、捧げる人は、かゝる献身に於ての神との交際を識つて食したであらう。ところで聖餐はキリストとの交際であつて、彼が我等のために己を捧げ給うたのみならず、われらもキリストにあつて、キリストと共に、父なる神に己がもち物すべてとともに自己を捧げるのである。

これこそ驚くべき一致である。イエスはみづからを我に與へ給ふのである。而

して私は己をキリストに捧げるのである。イエスは御自身を全く私のために與へ給ふ。私は彼に對して全く己をさし上げる。私の犠牲はイエスの犠牲の反映であり、片身である。

キリストは己が御意を父なる神に完全にさし上げ盡すために、その犠牲の充足に如何に意を用ひ給うたことであらう。しからば私としては、己が全生活をイエスに委ねまつることを求めるために、如何に多くの準備が必要とされることであらう、私自身のために全キリストをいたゞいてゐるのであるからには――。

「人みづからを省みよ」――信する者よ、聖餐の執行は、主に新に己を捧ぐる尊き機會である。どうか聖靈があなた方に對して、徹底せる基督者が如何なるものであるかを表して呉れるやうに。それは即ち心に於て、手に於て、唇に於て、家庭に於て、社會に於て、専心不斷にイエスに服従する事なのである。それはイエスのために生くることであり、イエスのために熱心に働くことであり、全く神に對してのみ捧げられる燔祭であり、聖靈の火にて焼かれたるものであらねばならない。かゝる精神に於て、聖卓の下によるこんで出で行くべきである。

祈
禱

父よ、爾は爾の御子の犠牲のうち新しく信仰を分與せしめんために我を召し給ふ。我は爾に呼ばはり、我を御子の自己犠牲の力・意向・精神を頌つものたらしめ給はんことを祈るなり。そは御子と交際することによりて、我も亦同じく爾に己を捧ぐることを得んがためなり。「永遠の御靈により、己を神に獻げ給ひたり」。我が神よ、願はくは同じ御靈をして、我をも爾への完き捧げ物と爲すことを得しめ給へ。

父よ、ねがはくは、われをして、自己を捧ぐることが、主の犠牲の本質と價値たることを知らしめたまへ。神の御意に己が感情と意志とを服従せしむることが、わが敬虔の特色たることを得しめ給へ。しかり主よ、我をして、神と人とのために全く己を獻げ、かくしてなんぢの榮譽と人々の救済とを達成するものたらしめ

たまへ。

わが父よ、聖餐に於て、我は神によろこばるゝ、活ける聖き犠牲として己を捧ぐることを冀ふなり——それは焼き盡されたる捧げ物なり。

このゆゑに、われはこの犠牲を爲すため自己を準備する恩恵を祈る。それは恰かも御子が、ゲツセマネに於て「我が意にあらすして、御意の成らんことを願ふ」とのたまひて、ゴルゴタに於ける犠牲のために己を準備されしが如くにてあり度し。されば我も自己の意志を全く服従せしめて、爾に己を犠牲として捧ぐることを得しめ給へ。おゝわが神よ、爾のみこゝろが、われにとりてすべてにてあることを得しめたまへ。わがうちに住み、われまた彼のうちにありて、己を爾に委ねまつるイエス・キリストの御能力に在りて、願はくは、彼のみことばが、我がものたることを得しめ給へ。「父よ、われ爾のみこころを行はんがために來る」と。

主よ、われをして、また斯く言はしめ給へ。——われはいま爾の御前にありて意識せる、また意識せざるあらゆる罪を捨てむとす。あらゆる主我的意識、自己

中心的なるものを、爾のみまへに擲たんとす。我はイエス・キリストをわが聖潔となし、力となし、また勝利となす。而してキリストが我のために備へ給ひし新しき性質に依りて、かく言はんとす。父よ、もはや罪なくしてただ主のみこころのみ在ることを得しめ給へ。——全く爾のみこころにてあり、また常に、すべてに於て、爾のみこころのまゝならしめ給へ。

主イエスよ、わがために爾は己を與へ給へり。されば我は爾のために己を與へん。しかり、主よ、いまこの一刻に於て、われは朝まだき聖餐のためにひとり備へしつゝ、天と地との前に祈るなり。神の御子イエスよ、われは己を全く爾にささげん、而して、これよりは爾のためにのみ生くることをせむ。主イエスよ、われいまこれを爲す。而して父と爾とに捧げし者として、われは聖卓に列り、そこにて信仰と告白とのうちに固うせられむ。われはもはやわがものならず。われは爾のものなるわが肉體と精神とによりて神を讚美せむ。

土曜日夕

聖靈を求むる祈禱

主なる神よ、主はこの週間準備のためにわれを導き給ひしが故に感謝したてまつる。また、朝まだき契約の聖卓に於て、爾と爾の御子と偕に食する希望を養ふことを得て感謝したてまつる。われは黙想と祈禱とのあらゆる機會のために感謝したてまつる。さればわれ無思慮に聖所にあらはるゝことなきを得む。このいと静かなる夕の一刻、われは聖靈の賜物のために主に願はんとて再び御許に到るなり。

主なる神よ、爾は我に敢へてのたまへり、キリスト無くして眞の祈禱もなく、爾との交通もなきことを。故に爾はその子等に聖靈を與へ給へり。而してそれに

よりて、かれら、キリストに在りて父なる神に享け入れらるゝを得む。主よ、願ふは次の如きことなり。即ち聖靈力強くわが衷に働き、われをして爾の選び給ひしもの、聖き飾りに於て爾に近づき得るあらゆる用意を分たれんことなり。たゞわれはキリストに全く忠信ならざりしことのみを知る。父よ、われを赦し、われより聖靈をとり給ふことなかれ。

願はくは彼、われをして新に罪を感じしめ給はんことを。わがうちに悔ひし心をもつて悔改を起さしめ給はんことを。おゝ主なる、わが神よ、願はくは今宵、われに猶ほ纏はり居るあらゆる罪を憶え、告白し、それを放擲することを得しめたまへ。(こゝに於て信仰ある祈願者は彼みづからの特別なる罪を考へ、神の前に之を告白せよ)。我は自我と、神より乖離せるわが性質とを深き嫌惡を以て考へたし。かくして自己に關するあらゆる確信を放擲し、自己に關するあらゆる満足をも放棄せまほし。主なる神よ、聖靈をして我が衷に働かしめ、心靈的にわれを更生せしめ、かくしてあらゆる罪をして、ますます厭はしく、堪えがたきものた

らしめたまへ。かくの如くにして、わが罪深き天性を心靈的に認識し、更に貧しく且つ和やかなる精神を以て主に會ひまつることを得させたまへ。願はくは、よろこばしく榮えある心の貧しさが、わがたましひの衷なる聖靈のゆたかなる内住の結實たらしめ給はんことを。

而して主よ、かくの如くにして、わが衷にある爾御自身の御靈の働きの結果が強く、よろこばしき信仰たり得むことを。而してそのすべての約束と祝福とを携へ給ふ完きキリストが心の中に認められ、且つ樂しまれんことを。しかり、わが神よ、聖靈がわが衷に、人の視るところに於ては實に厭はしかるべき謙遜といふ果實を齎し給はんことを。而してこの謙遜たるや、自己を全く拒否すべきものと痛感すると共に、愛せらるゝ子供として嘖はれたる者の歡喜を同時に持ち得るものなり。

願はくは主、われを見出し、わがうちに神の永遠の愛を注ぎ、かくして主のわれに對する親しき愛の經驗が此の世に於ける他の如何なる人々の愛情よりも確實

にして明白なることを得しめ給へ。おゝ主よ、聖靈これを爲し得給ふなり。主はわがたましひに、神の愛を眞の賜物として天より降し給ふ。願はくは、この賜物が交際の時に眞にわれに近きことを得しめたまへ。主よ、われ御約束にすがりたてまつる。われは聖靈の大なる力強き御働きを待ち望む。

かくして我愛が聖卓に於て燄の如く燃ゆることを得しめ給へ。さればわれ主の御顔を見ることを得、わが全靈は彼によりて奪はるゝことを得ん。かくてわが主に對する服従をして眞實にして有力なるものたることを得む。尊き神よ、われより遠ざかり給ふことなく、われに豊に聖靈の力ある御働きを與へ給はんことを。かくてこそ聖餐を守ることが父なる神と子なる神と聖靈との眞の交際たることを得ん。而してわが周圍にもわが衷にも天上的的祝福を受くるのみならず、わが衷に天上的生命を受け、神の祝福を充分に知り且つ享受することを得るに到らん。主よ、われ御約束に頼りたてまつる。われ爾の御前に黙して聖靈を俟つ。われは主わがうちに働き給ふといふ信仰を持して主に自己を捧ぐ。われはこの外に今

一つの恵みを求めたてまつる。願ふは會衆を司どる爾の下僕に、また會衆それ自身に、爾の尊き聖靈が、その默せる天上的力をもつて、有力に働き、かくしてこの祭の時が、始終大なる祝福の時たることを得んことなり。願はくはいま死せる人々が、活かさるゝを得んことを。主よ、この願ひ、御子によりて捧げたてまつる。アーメン。

第二部 聖餐の主日

われ、いま、こゝにまのあたり
主を見たてまつる。

こゝに、われ、見えざるものに
觸れ、それを執ることを得るなり

こゝに更に確なる手をもて

永遠の恩恵を把握す

而してわがすべての弱さを悉く

主に投げかけたてまつる。

こゝにわれ神のパンにて養はる

こゝになんちと共に天の尊き美酒をくむ

こゝに地上のあらゆる重荷を卸し、

赦されたる罪の平安を新に味ふ。



いまこそ饗應と讚美との時なれ！

これぞわがために設けられし、

天上の聖卓なり、

こゝに、われ饗應にあづからん、

而して、爾との交際の短く尊き時を

引きのばすことを爲さん。

——ホレイシアス・ポーナー——



主日の朝

信仰の實踐

愛しまつる主イエスよ！ わがたましひののぞみは主にこそあれ。爾に在りて御父の愛はわれに示されたるなり。爾は地にありては死するまで我を愛し給ひ、天の榮光のうちにありて猶ほ我を愛し給ふなり。爾はそのうちに在りてこそわがたましひが生命を得る存在にこそあれ！ 愛しまつる主イエスよ、わがたましひは切に爾を慕ふ。この聖き朝に於て、爾に對する信仰を試み且つ新にして聖卓に侍る準備を爲さんとす。わが救主よ、願はくは主みづからわが衷に來り給はんことを。わが信仰は、爾を識るために爾が我に與へ給ひしものゝ結果に外ならざるなり。

わが救主よ、今朝また以前の如くわが衷には依存するに足る何物もなしとの告白を以て主の御前に出づるなり。あらゆる経験はわが罪に就きて爾の言ひ給ひし事をわれに確信せしむ。即ち、我が衷には、しかり我が肉體のうちには何の善きものも存在せずといふことなり。而も我は爾の前にわが要求を提出するため来り、その要求の承認を求め、爾をわがものとせむとす。おゝ主よ、わが要求は、父なる神のみことばに基づくなり。即ち、神は御子を罪人のために與へ給へる事、また、主は不義なる者のために生命を捐て給へりといふことなり。わが罪深きことこそ爾に對するわが要求の權利にこそあれ！ 爾は罪人らのための存在にて在すなり。わが要求の權利は神の永遠の義なり、保證は既に拂はれたり。我は罪より解放されざるべからず。わが要求の權利は爾の愛に根ざす。爾は惱めるものに憐憫を有し給ふ。わが要求の權利は爾の眞實にあり。わが救ひ主よ！ われは己を爾に與へ、而して爾は我をうけ入れたまへり。而して爾がわが衷に始め給ひしことは、爾は必ず全うしたまはん。爾と我との間にあることはわれに勇氣を増し

加ふるなり。而して今や我は我がものとして爾を受くるために來り、爾の存在と所有との故に、爾を楽しむなり。愛しまつる主よ、爾を我に向ひて啓き給へ。そはわが信仰まことに強くなり、よろこばしくならんためなり。

しかり、主イエスよ、爾はわがものなり。その十全を以てして爾はわがものに在す。神は頌むべき哉、われはかく言ふことを得——なんぢの血は我が物なり、そはわが凡ての罪を贖ひたり。爾の義はわがものなり。しかり、爾御自身がわが義にて在す。而して我を父なる神に享け容れらるゝものたらしめ給ふ。爾の愛はわがものなり。しかり、イエスよ、その高さ・深さ・長さ・廣さを以てして、爾の愛はわがものなり。これぞわが住む居所、またわが呼吸する空氣にこそあれ。しかして爾の持ちたまへるもの悉くわがものなり。爾の智慧もわがもの、汝の生命もわがもの、なんぢの榮光もわがもの、なんぢの力もわがもの、なんぢの聖もわがものなり。爾の父もわがものなり、愛しまつる主イエスよ、わがたましひはこの日唯一の願望を持つ。即ちわが全能の友なる爾が、默せる而も力強き信仰の

活動をもつて、我をして爾をわが所有と見かつ認識せしめ給はん事なり。主イエスよ、爾に依り頼みまつる信仰の單純を以てわれは言ふ——神は頌むべきかな、十全のイエスは我がものなり。これ迄いかにこの眞理を認識し、楽しむことの少なかりしぞ。十全のイエスはわがものなり。

主よ、いまわれを助けて、主の愛の寶庫よりする新しき交際の恵まれたる期待を以て聖卓に近づくことを得しめ給へ。わが信仰をして常に強きのみならず、また大ならしめ給へ。その信仰が、わが口を大きく開くことを得しむるものたらしめ給へ。いまわが要するものは多くあるも、何にも優して要するものは是なり。即ちわが主をわがたましひの毎日の糧として知ること、而して主がいかに日毎わが能力わが生命にてあり給ふかを理解することなり。わが願望はたゞ聖卓に於てのみならず、地上に於けるわが毎日の糧として、わが主イエスがよろこびてわが生活の責任を持ち、わが生命となり、わが衷に彼の生命を活かさんことなり。おイエスよ、今日この眞理を把握することを得しめたまへ。

愛しまつる主よ、われは爾はわが衷にこの事を爲す能力を持ち給ふことを信ず。われは爾の愛われを待つことを知る。而してわがために喜びて爲し給ふことを知る。主よ、爾はわが不信を助くるために來り給ふことを信ず。しかり、われ充分にその理解することを得されども、われはイエスがこの日、新たにわが生命として己をわれに交際らしめたまふことを信ぜん。而して、聖靈の御働きを以て高きに於て營み給ふその天上的生命を更にゆたかに分ち給ふことを信ぜん。而して今日汝がわれに爲し給ふことを、今後日毎確實に爲し給ふことを信ぜん。而してしかり貴き救主よ、この日、われすべての悲しみをたづさへて己を御前に置き、わが衷に爾がすみ給ふために、己を主に委ねまつる。而して、爾は全く我が所有にて在すが故に、爾われをして備へせしめ、わがうちに入り、我を所有し、爾をわが衷に充たしめ給ふことを信ず。主よ、われ信ず、願はくはわが衷に信仰をまさせ給へ。

而して主よ、願はくは我と爾の凡ての會衆をして聖餐の尊き執行に對して備へ

を爲すことを得しめ給へ。われらのうちに働く能力をもつて、われらが願ひ、思ふにまさりて多くの事を爲し給ふ主に、世々限りなく教會とキリストにありて榮光あらんことを。アーメン。

一、取りて食へ

「取りて食へ、これは汝らの爲に與ふる我が體なり。」(マタイ傳二十六章二十六節、ルカ傳二十二章十九節)

そは彼を受け、そを十字架の上にて、御自身のためならず、我等のために、割き給ひしからには、主がこの言を言はれし時、主の御身體は御自身のものと言はんよりは、われらのものたることを現してゐる。かくして、御體とともに、主はわれらに御自身を與へ、われらにそれを受けんことを望み給ふのである。聖餐に於ける交際とは與へ且つ受ける交際である。まことに恵みふかき恵與であり、また恵み深き享受である。

恵み深き恵與——ある人格がその賜物を價値あらしめ給うた。而して與へたまふものは誰ぞや、こゝに來りてわがたましひの求めるものを與へたまふのは、實

にわれらの創造主にて在す。聖卓に於て、彼がわれらのために贖ひ給ひしものを我等の所有として與へ給ふものは、われらの贖罪主にて在す。

而して彼は何を我に與へ給うたであらうか？ 彼の血と彼の肉體とである。神はその與へ得る最大・最良のものを賜ふ。それは罪の犠牲として父に彼が先づ捧げ給ふたる裂かれし肉體である。歡喜を以て彼を充たし給ふ犠牲である。彼の前に罪を除去するために彼が父にさづけ給うたものを、彼はいまや我が衷なる罪を除去するために我に與へ給ふのである。

而して何故に神はこれを與へ給ふのであるか？ そは彼が我を愛し給ふからである。彼はわれを死から贖はんとぞみ給ふ、而して我に、彼の衷にある永遠の生命を與へんとし給ふ。彼は御自身をわが靈魂の食物とし、よろこびとし、また活ける力として與へ給ふ。おゝ永遠の愛の、尊き天上的なる惠與よ！ イエスは己がからだを我に與へ給ふ。イエスは御自身をわれに與へ給ふ。

これはまた實に尊き享受である。如何となれば、それは實に單純であるからだ。

私が自分の手によつて、我がために備へられたるパンをいたゞき、わが物としてそれを持つ時、そのうちに於てイエスが御自身をわれに與へ給ふところの、言葉に對する信仰によつて、私は彼をわがものとし、また彼が眞に自分のものであることを知るのである。彼が罪のために苦しみ給うた御體は實に私の所有である。主の贖罪の能力はわが所有である。イエスの御體はわが食物、またわが生命である。

而もこの享受がいかに自由であるか。私は私の無價値なことを考へる。而もその無價値が實は不義なる者のために死に給うた義しき存在である主に對して依存する理由であることを識る。私はかくも懇ろに準備されたるこの聖きパン——即ち整へられたる饗應の食物に對する饑餓として自分のみじめさを考へるのである。かくイエスがその愛によりて、かくも心から與へ給ふところのものを私も心から、且つ自由に受けよう。

而して、かゝる享受はほんたうに眞實である。神與へ給ふところに能力あり生

命がある。恵與のうちには、交際があり、備へられたるものゝほんたうの分與がある。従つて、わが享受は斷じて自分の力に依存するのではない。私は、救主が齎し、且つ心のうちに頌ち給ふものを戴くのである。虫けらに等しい私が、全能の神の與へ給ふものをいたゞくのである。尊き恵與と、そして尊き享受よ！

榮光の神よ！ どうか私の享受が、あなたの恵與と一致することが出来ませうに。神の與へ給ふものを、私は全體としていたゞく。爾が與へ給へば、私は心から迷ひなく、喜んで拜領する。貴き主よ、わが享受は全く爾の恵與に依存する。主よ來りて與へ給へ。爾御自身を、聖靈の交際の裏に、眞實に、能力を以て與へ給へ。とこしへの贖主よ、來り給へ。「汝らのために與ふる我が身體なり」との御言の秘密を我に啓き示し給ふとき、爾の愛をして、我がうちにありて喜び且つ満足せしめ給はんことを！ しかり、主よ、われ爾を俟ち望む。爾が爾の裂かれたる肉體のうちに、わが分け前として與へ給ひしものを、我とりて且つ食ふ。かくてわがたましひは爾後よろこび、強められ、主に感謝し、主に仕ふることを

得む。アーメン。

一、わが記念として

「わが記念として之を行へ。」(ルカ傳二十二章十九節)

「わが記念として之を行へ」——かゝる訓示が實際必要なものであらうか？
われらがイエスを忘れるといふ事は可能であらうか？

イエスを忘れる！ 永遠に我を思ひ給ふイエス！ たとへ己が十字架上の苦は忘れ給うても、私の苦を忘れ給はないイエス！ また天に於て彼が私を忘れ給ふよりは、却つて生みの母がその兒を忘れる位のものだとも、我に言ひ給ひしイエス！ 私がイエスを忘れ得るであらうか？ イエスこそわが太陽、わが保證、わが花婿にて在す。その愛無くして我等が生きて行くことの出来ない我がイエスをどうして忘れる事が出来ようか！

しかも悲しい哉、如何に屢々そのイエスを忘れる事であらう。如何に屢々愚か

しい私の心は、イエスを歎かせたてまつたことであらう。そしてイエスを忘れる事によつて私の愚かしい心は自らのために、あらゆる悲哀を準備してゐることであらうか！ われらが迷路に踏みこんで苦しんだのは、或時は心配・罪・歎きの時に於てあり、或時は繁榮と喜びのうちに於てあつた。わがたましひよ、イエスを忘れることを深く恥ぢるところあれ！

而してイエスは決してお忘れになる事がないであらう。彼御自身のためにかくの如き事が在り得ないことを示し給ふであらう。彼はわれらを親しく愛し給うて、われらに愛せらるべき多くのものを持つて居られる。故に忘れられるのに堪え給はない。われらの愛はイエスにとつては幸福であり、よろこびである。彼は聖き厳格さを以てわれらからそれを要求し給ふ。彼は忘れられるのに堪え給はない。永遠の愛が我らを選んだのは、實に眞實であつて、それによつて日毎われらの記憶の裏に生きんことを望んでいられる。

また主はわれらのために主が忘れられないやうに心を用ひ給ふ。かゝる回想を

通す記憶によつて、過去はその眺望に於て現在となる。イエスは常に我らと偕に居り、われらの傍に在すことを熱望し給ふ。かくして我等が主の十字架の愛とその天上的生命の能力とを味はしめんとし給ふのである。イエスはわれらが常に彼を憶えることをのぞみ給ふ。

われらは斷じてイエスを忘るゝことなきやう切に望む。聖卓に於て、彼はわれらをその愛によつて覆ひ且つ満足せしめ給ふ。彼は私に對するその愛をいかにも榮譽あるものとなし給うて、われらの愛が常に記憶のうちにしつかりと主を把握するやうに導き給ふ。更に、主は私と一致し給ひ、わが衷に己が生命を與へ、かくしてわがうちに内住し給ふ御能力によりて主を忘れたてまつることが私にとつて不可能にならしめたまふ。私はいまゝで、イエスを憶えることをあまりにも義務とし、仕事と考へるやうになつてゐた。主イエスよ、願はくは主を憶えざるが如きことは私にとつて在り得ないほどに、歡喜を以て我を充たし給へ。主はいとも懇ろなる愛によりて、私を憶え給ふが故に、主を憶える想念が私の衷に消える

ことはないであらう。

この目的のためにこそ、主は聖餐に於けるその愛の新しい記憶を私に與へ給ふのである。されば私は、イエスが常に彼を憶えるやうに私を教へ給ふといふ喜ばしき確信によつて聖餐に近づきまつらう！

われらの主よ、爾の愛はいかに妙すしき哉、そは、われらによつて憶えられることが爾にとつて深甚の興味ある事であり、われらの記憶の中に——われらの愛のうち常に生きていることを冀ひ給ふ程に主の愛は妙しき限りなり。主よ、わが心が爾を憶えるやう教へられたるは己が力によるにあらざること、爾はよく知り給ふところなり。さり乍ら、若しも爾の愛によつて、爾がわが衷に住み給ふならば、爾を想ふことは歡喜にして——何等の努力や苦心なくして、實に甘美な安息なり。主よ、わがたましひはこの聖餐の妙しき恩恵の故に爾に感謝したてまつる。第一に、われらの靈魂の毎日の糧として、爾の永遠にして渝らざる愛のうちに、爾御自身を與へ給ふ。次いで、爾の約束されたる臨在の能力によつて、我らを充

たし給ふ。それによつて主はわれらを養ひ、爾を忘れざらしめ給ふ。故に我はこの事を約しまつらん。おゝ主よ、この聖卓に於て、わが靈魂に對しその糧として御自身を與へ給はんことを、而してそれが日毎の糧となることを得しめ給へ。さすれば爾の愛は爾が常に生きて居給ふとの想念を保ち給はん。かくて、我は再び主を忘るることあらじ。否、一瞬時も忘るゝ事あらじ、されば爾の愛のうちにあるにあらざれば、何の生命をも持つことを得ざらむ。アーメン。

三、わが血

「また酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ『これはわが血なり』。(マタイ傳二十六章二十七、二十八節)

「我らが祝ふところの祝の酒杯は、これキリストの血にあづかるにあらずや。」(コリント前書十章十六節)

「其は肉の生命は血にあればなり。我汝等がこれを以て汝等の靈魂のために壇の上にて贖罪をなさんために、是を汝等に與ふ。血はその中に生命のある故によりて贖罪をなす者なればなり」(レビ記十七章十一節)。如何となれば血は生命にして生ける靈であるからだ。故に贖罪は血を灑ぐことゝ關聯してゐる。それは罪ある人間の身代に純潔なる動物の生命をさゝげることである。かくしてイエスの血を灑がれたことによつて主の生命は我等の罪のためにさゝげられたのである。

その血の價値と能力とは取りも直さず、イエスの生命の價値と力とである。その血の一滴一滴は、永生の能力をそのうちに持つてゐる。

イエスは彼の血を我に與へ給ふ。私はその血を分たれるものとなる時、私はその血が爲し終へた贖罪にあづかることとなり、それが獲得した赦罪にあづかる事となる。而してそれがそゝがれた時の驚くべきあらゆる苦痛をも分つこととなるのである。またその苦痛、その血潮とがその啓示であるところの愛の凡てにあづかることともなるのである。私はまた血のうちに在るところの生命に一度は捧げられ、後また取りあげられたる生命にあづかる。私は十字架に於て抑へられ、而して墓よりあげられ、今や天に於て崇められたる、イエスの生命にあづかるのである。おゝ、「飲め、これは我が血なり」といふ御言に潜む恩恵の貴き不思議さよ！

イエスの血はわが生命の飲物である。イエスの愛はわが生命の能力である。イエスの生命の精神はわが生命の精神である。おゝわが神よ、この不思議を識るこ

とを得させ給へ。かゝる聖國の新しき酒によりて養はれ、たゞに潔めらるゝのみならず、實際に飲むことによつて、神の御子の血にあづかることによつて養はれる生命は如何に力強く且つ天的なるものであらうか。

貴きイエスよ、われをかく驚くべきまでに愛し給ひし爾は、いま爾に向つて申し出づるわが要求を否み給ふことは無いであらう。——なんぢが今も猶ほ高きよりして、わが罪の赦しの故にそゝがれたる血を我に飲ましめ給ふ時、願はくは爾が我に與へ給ひしわが衷なる爾の生命の秘密を啓き示し給へ。いと貴き救主よ、わが信仰を照らし、擴げ給ひて、われにいま次の眞理を充分に認識せしめたまへ。——イエス御自身の生命は我の最も内なる存在にして、わが生命の生命なること。即ち「みづからの血をもつて一たび聖所に入り、父より永遠の贖ひをとり」給ひたる彼にて在すことを識らしめたまへ。爾御自身の血をとほして、わが心のうちに臨み、この贖罪をもたらしめたまへ。主イエスよ、わが心は爾を慕ひあへぐ。いまその貴き血潮とともに我に來り、われに對して、爾御自身が、その血の全き

力を現し給へ。かくしてわが渴望を醫さしめたまへ。願はくは、その血がわれよりあらゆる不義を潔めしめ給はんことを。願はくは、我をして、かく歌ふ人々の歡喜と讚頌に聲を合するものたらしめたまへ。「われらを愛し、その血によりてわれらを罪より解き放ち給ひし主に、榮光と稜威と世々限り無くあらんことを。」
アーメン。

四、新しき契約

「この酒杯は汝らの爲に流す我が血によりて立つる新しき契約なり。」(ルカ傳二十二章二十節)

聖餐は蓋し契約の食物である——新しき契約の饗應である。故に新しき契約を充分に理解することは何よりも重要である。

それは古き契約とはまるで違つたものであつて、更によく、また更に尊きものである。イスラエルのために神が爲されたる舊き契約は、まことに尊いものである。さりながら、それは罪ある者に適用することが出来ない。如何となれば彼はそれを果すことが出来ないからである。神は、かれらがそれを遵守しつゞけることが出来るならば、御自身の祐助と指導と祝福とをもつて主の全き律法をその民に與へ給うたのである。然し乍ら、人間はその内なる生命に於て猶ほ罪のもとに

在つたのである。彼は神の契約に常住することに必要なところの強さに缺けて居たのである。

神は新しき契約をつくることを約し給うた。(注意してエレミヤ記三十一章三十一—三十四節、三十二章三十八—四十二節、ヘブル書八章六—十四節をよめ)。この新しき契約に於て、神は罪の最も完全なる赦免を與ふることを約し給ひ、人々を神の恩恵に入れることを約し給うた。更にまた彼にその律法を傳へることを約したまうた。しかも外部的に板に記したものでなく、心に記したものととしてある。かくして人をしてその訓言を實行せしむる力を持たしめんとされたのである。神は人間に新しき心、新しき精神——即ち聖靈を與へ給ふことになつたのであつた。人間は彼が神の律法に歩むといふ約束を先づ爲すやうに告げられたのではなく、神が先づ進んで、人間をしてそれが出来るようにしてやらうと約束されたものである。主はエゼキエルに對し、「吾靈を汝らの衷に置き、汝らをして我が法度に歩ましめ、吾が律を守りて之を行はしむべし」(エゼキエル書三十六章二

十七節)。

この新しき契約については、イエスが仲保者であり、また保證であり給ふ(ヘブル書十二章二十二節、十三章六節)。保證として彼は神がその凡ての約束を成就し給ふことを我等に對して誓はれるのである。また同時に、保證として、神に對し、我等が神の御戒めをことごとく守るといふことを、我らのため誓はれる。これこそ、我等のあらゆる必要に對する驚くべき備へを伴ふところの尊き恩恵の契約である。主イエスの衷に、神はこの契約が成就されることを視給ふ。しかも神の権利が何等の侵害を受けないことをも視給ふのである。神は己が榮譽が侵されることなく、この契約が實行されるやう御子に凡てを委ね給ふ。而してイエスにあつて、我等はそれを果すことが出来ないだらうと恐れる事なくして、この契約に入つて行くことが出来るのである。我等は、イエスがわがうちに、またわがために、完成に必要な有ゆるものをもたらし給はんがために、イエスに依り繼ることが出来る。この新しき契約にあつては保證たるイエスは、たゞに古き負債

を全く辨濟し給うたのみならず、われらの場合に猶ほ必要な他の如何なることに對しても責任を履行し給ふのである。

おゝわが神よ！ この新しき契約に在つて、私はいま私自己を獻身したてまつる。爾は、そのかゞやかしき御約束によつて我を爾御自身に結びつかしめ給ふ。また爾はわが罪を赦し、子として我を愛し、我を訓練し、我をきよめ、また我を祝福するためには御自らを束縛し給ふ。而して我に力と願望とを與へて爾の契約に住し、爾の御旨を爲さしめ給ふ。而して我は爾の貴き御子にあつて汝に囚へらる。とこしへの神よ、願はくば、新しき契約の一つなる聖靈が、爾の愛が、契約にありて、如何に我がために與へらるべく定められたるものなるかを啓き示したまはんことを。願はくば、我をして爾の道を歩むことを得しめ、また爾が、その實踐を悉くなし得るために契約の保證として御子を我に與へたまふことを約束されしことを充分に了解せしめたまはんことを！ さすれば、御子が我に在りて契約の成就であり給ふ事——即ち爾の契約の成就たると偕に、またわが契約の義務の成

就にて在り給ふことを認むる歡喜をもつて、爾の血のうちに封じ込まれたる御子とその契約とをいたゞくことを得るなり。

尊きイエスよ！ 願はくば、この日、われに契約の血をさづけ給へ。アーメン。

五、罪の赦を得させんとて

「わが血なり、罪の赦を得させんとて、流す所のものなり。」(マタイ傳二十六章二十八節)

罪——聖卓に於てもこの言葉は無くすまされるわけではない。われらにキリストに對する權利を與へてくれるものは實は罪である。キリストがわれらに對して爲すところあらんとし給ふのは罪からの救主としてである。われらが聖卓に跪づくのは罪人等としてである。われらが常に直接にキリストに行き、キリストを己が有とすることが出来ないとしても、我等は常に我らの罪の故にキリストに到ることが出来る。われらは必ずしも常にわが手をキリストの上に置き、そしてキリストはわがものなりと言ふことは出来ないかも知れない。しかし乍ら罪は我がものなりとはいつでも言ふことが出来る。而してキリストは罪のために死に給

へりとの善き普訪を聞く時には、われらは次の如く言ふだけの勇氣を持つことが出来る——「罪はわがものである。而して罪のために死に給うたキリストはまたわがためにも死に給うたのである」と。私が自分の義を見るときには、勇氣が沮喪する。しかし乍ら、先づ罪を見るとき、私は大膽にもキリストはわがものなりと言ひ得る。罪！ それにしても聖卓に於て、イエスの御口からこの言葉をきくことは如何に甘美であらうか。

而してわが救主は罪について何と言はれたであらうか？ 彼はそれについてはたゞ罪の赦しの確證を與へるためにのみ言つて居られる。即ち神は最早わが罪を憶え給はず、それを我に負はせ給ふことなく、わが罪を視ることをのぞみ給はず、またそれに相當する怒りをもつて我を扱ひ給ふことなく、たゞ罪は既に除き去られたものとして愛と満足とを以て我に對し給ふといふ意味である。これこそ己が血を示し、それを私のものでして與へ給ふ時、イエスがわがために保證し給ふところのものである。おゝわがたましひよ！ これこそ汝がその血をのむとき、信

じ且つ樂しむところのものである。而してあなた方が、聖靈により、この聖なる救しが完全であり、効果があり、全きもので、常に確實で永久的であることを識らされることが出来るようにと主に願ひ求める時、あなた方はまたかく歌ふことが出来るであらう。「その罪赦されたる者は倅ひなり」と。

而してあなた方はまたこの赦しはそのうちに他のあらゆる祝福を含んでゐる生ける種子であることをも知るであらう。如何となれば、神がその罪を赦し給うた者をば、受け入れ給ひ、それを愛し、子として認め、そのあらゆる賜物と偕に聖靈をも與へ給ふからである。罪の赦は、言はゞ、神の恩恵の凡ての富に入る保證である。日々主イエスにありて赦しを樂しむところの靈魂は、更に主の喜びと能力とのうちに進み行くであらう。

おゝ、何といふありがたい饗應であらうか！ 自分自身を贖はれたる靈魂としてイエスと一つなることを知ること、そして彼の衷に在りて、わが罪を見ることが出来ることこそ眞の至福といふべきである。それが倅であるわけは、元來甚だ

しく恥ぢなければならぬ罪に對して主がその指を以て示し給ふとき、われらは「赦されたり」といふ尊き御言を聞くことが出来るからである。倅であるわけは、この赦の確證と、あらゆる幸福の享受のために、われらは罪の赦のために流されたるその血によつて養はれるからである。倅ひなわけは、赦の喜びと、その血の樂しみのうちに、新しく、かくも自分を愛し給ふところのイエスと結びつくからである。然り、倅ひなわけは、罪に代つて、主は御自身を與へ給うて、わが空白な心のなかを充たし、その心が、主御自身の生命の光と美とによつて飾られるやうに爲し給ふからである。罪の赦のための、尊き饗應よ、また飲物よ！

尊き救主よ！ われらは、自ら、己が罪を視ることを恐れ、それを知り、それと闘ふことをも恐れる。然し乍ら、主の赦の喜びと能力とのうちにあつて、最早や罪を恐れることをしない。今や克服者として罪を視得るのである。多くのことが赦されたる者として、願はくは主を愛するやう助け給はんことを。アーメン。

六、多くの人のために

「わが血なり、多くの人のために罪の赦しを得させんとて、流す所のものなり。」(マタイ傳二十六章二十八節)

イエスは大なる心情を持ち給ふ。聖卓に於ては、イエスは彼の周圍に集り來る者たちを思ひ給ふために、御自身を忘れたまふのみならず、その愛に充ちたる眼は、その血によりて贖ひ給うた凡ての者どもを見そなはすのである。「多くの人のために——」。この語を以て彼はその弟子たちに共同をつゞけるやう教へたまふのであるが、番に卓の前に跪づいてゐるものとのみならず、何人も數へることが出來ない位の贖はれたる凡ての群との共同を教へ給ふのである。この言にてらして、我らは彼が弟子たちにパンを裂き、それを與へ給ひ、ついでペンテコステの日以後に群集に對して與へ給ひ、更にます／＼その範圍をひろめて、われらが

いま跪づいてゐる場所にまで及ぶのを見るのである。この眞理は、聖餐のあらゆる執行を、それを創始し給うたイエスとの直接な交渉による單一なる交際にまで要約してしまふ。それは、分れてゐるキリストの弟子たちの集團を一つの公會に結びつける。而してあらゆる差別とあらゆる分離とは、各員ともに一つの首の愛と生命とを等しく分たれてゐるといふ喜ばしい思想のうちに滅却してしまふのである。而してその同じ首から各員ともにパンをいたゞくのである。

従つて聖餐を拜領することは、番に首との一致の感情を新にするのみならず、また我等がその一員であるところの身體との一致の感情をも新ならしめるのである。聖餐はイエスの御心の廣きが如く、われらの心をも潤くしなければならぬ。而して主イエスに對する愛について兄弟に對する愛が我等の靈魂を充たさなければならぬ。主の唇より出でたところの我等にとつて頗る貴き「汝らのために」といふ言葉と共に、他の言葉である「多くの人のために」といふ言葉も憶えて置かなければならぬ。

「多くの人のために」——ある種の基督者たちは、彼等自身の小さい群とよく行けばそれで満足してゐる。彼らは彼らと同じところに屬する人々と偕にするだけで天國へ行けるものと思つてゐる。然し乍ら、そんなことでは駄目である。聖餐は凡そイエスに屬する凡ての人々のために祈り愛する位に我等の心を潤くするものであらねばならない。かくて我等をして彼等と偕によろこび、かれらと偕に歎くやうにあらしめなければならぬ。否、これだけにとゞまつてはならない。イエスの眞の弟子は、未だ罪の裏に居り、「多くの人のために」流されたところの血について知らない凡ての人々の事も考へなければならぬ。この血の能力のあらゆる眞の経験は、ます／＼深く、それが注がれたる感情や状態に我等を導き、しかして、それに關する知識に導き入れ、またキリストがそれらのために血を流された多くの人に關する了解にも導かなければならない。しかして「多くの人のために」流されたる血を眞に飲む者は、その血のうちに注ぎ出されたる生命と愛とを内面的に分たれるものとなるのである。イエスが「多くの人のために流す」と

ころの……わが血」と仰せられた時、どうしてあらゆる利己的な點や狹量が取り除かれ、その心が潤くされてイエスの心情とイエスの御言との潤達と合致する迄にならずに置けるだらうか！

貴き救主よ！ どうか爾の靈を我に賜ひて、爾のうちにあると同じ心がわが衷にも在ることを得しめ給はんことを。聖餐の時に於てすら主が「人々を強ひて連れきたり、我が家に充たしめよ」とのたまふことを識ることを得しめ給はんことを。願はくは、爾の民をして「尙ほ餘の席あり」との思想に充つることを得しめ給はんことを。おゝ主イエスよ、みづから愛にています爾が、願はくは聖靈によりてわが心に爾の愛をそゝぎ給はんことを。アーメン。

七、汝らのために

「汝らの爲めに與ふる我が體……汝らの爲めに流す我が血……」(ルカ傳二十二章十九、二十節)

こゝに古い言葉がある。「眞の幸福の秘義の凡ては、『われに』といふ一語に盡きる」といふのである。「わが爲めに」といふ短かい語の個人的自得のない限り、眞理の全知識も、福音の全理解も役に立たない。而してこの人の言葉は、一面、その根柢をイエスの「汝のために」といふ言葉に置いてゐる。

聖卓に於ても同じであつた。己が身體と血とについて語られるに當つて、救主はその弟子達に向つて仰せられた。「汝らのために與ふる……汝らのために流す……」。

後年弟子たちはこの御言によつてどれだけ勵まされたことであらう。深い沈淪

のうちのペテロも、歎かほしい不信のうちのトマスもまた他の一人一人も、この御言を憶える時、どうして奮起せずに居られたらうか！ 實際主は如何にも懇ろに私に向つて語られた。主が「汝のために與ふる」と言はれた時、恰も私一人に向つて言はれてゐるかのやうに思はれるまで。

私にとつて聖餐が最も豊かな祝福を包んでゐるのは、實は矢張りこの御言のうちにある。如何となれば、最初の弟子たちに對する如くに、救主は、今もその賓客の一人一人に仰せられることをのぞみ給ふ。——「こは汝のために與ふるものなり」と。聖靈によりて、主は最初の弟子たちに對する如く、われらにも近く在す。彼はわれらをして、その眼、その御聲の力を感ぜしめ給ふ。一人一人に對し別々にパンを手渡し給ふのみならず、聖靈の貴き働きによつて、イエスは一人一人に向つて「汝に與ふる」とのたまふ。

感動的なその御言よ！それが如何にわが心を貧しくし、わが心を屈せしむべきであらう！そこに神の御子が榮光のうちに坐して居給ふ。而もそこに今まで

敵であり、汚れた者であり、今なほ不信であり、罪を犯してゐるところの私が、塵のなかに跪づいてゐるのである。而して視よ、聖き心とやさしい愛とのこもつた眼を以て、主はその裂かれし身體と注がれし血を指し示し給うて、宣給ふ「汝のために……汝のために」と。

主よ、これにて充分なり。かゝる貴き御言の故にわが靈魂は爾に感謝す。その語を強く保ち、そのうちに、應へたてまつるべき確信を持つ。しかり「我がために……我がために……」。「多くの人のために」なれども、亦そは我がためなり。その血の示すところの愛・贖罪・生命・榮光は、「わがため……わがため……」なり。

貴きイエスよ、わがたましひは「汝のために」といふいつくしみ深き御言の故に爾を頌めたてまつる。願はくは我がねぎごととに耳傾むけ、聖卓にありて聖餐が力強く、われにこの語を語り給はんことを。願はくは爾の語り給ふ凡てについての確信ある、喜ばしき理解のために我を強め給はんことを！ 而してわが手その

パンを執らんとし、またその血を飲まんとき、「わがために……わがために」といひ得る潤く且つ明白なる信仰を與へ給はんことを！ めぐみ深き主よ、われ黙して聖靈を待つ。如何となれば爾よりこの御言をいたゞく事は聖卓に於けるわが祝福の秘義なればなり。而して爾、われにこれを與へ給はん。アーメン。

八、一 體

「多くの我らも一體なり、皆ともに一つのパンに與るに因る。」(コリント前書十章十七節)

「われ新しき誠命を汝らに與ふ、なんぢら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし。互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん。」(ヨハネ傳十三章三十四、三十五節)

首たる主イエスと一致することは、同時に身體の各々肢體と一致することをも含めてゐる。實際に、イエスの身體を食ひ、その血を飲み、彼の身體と結びつく人は、そこで全身體と密接な關係を持つこととなり、従つてその各々の肢體と關係をもつこととなる。われらは主がそのために死に渡し給うた主の身體と交際するのみならず、主が死から甦へらせ給うた主の身體——即ち教會と交際するのである。

「われらは一體なり。皆ともに一つのパンに與るに因る」とあるが如くである。新しき契約の聖卓に於ける彼を信する弟子達のこの一致は深く且つ驚くべきものであり、それによつて主の身體として彼のうちに於て一つとして集められた聖靈の生命は全く新しいものであることは、主が彼等を活かすべき愛を新しき律法として語り給うたほどである。この新しき契約のうちには新しき生命があり、従つて新しき愛がある。「互に相愛することをせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん」。

この思想は聖卓に於てあまりに忘れられ勝ちである。そしてそれは教會の大きな損失である。客人たちは如何に屢々互に識り合ひ、愛し合ふこともなく、また互に共同を保つこともなく、互に扶助し合ふこともなしに、幾年も幾年も、互に隣りに坐り合せた事であつたらうか！多くの人々が、主との更に緊密なる交際をのぞみ乍ら、それを得ることが出来なかつたのは彼等が身體のない首だけを持ちたく思つたからである。また身體の一致が全然無視されて居たが故に、多くの祝

福が聖餐に於て見失はれたのである。しかし、そのことが了解されて居ればよかつたのである。イエスは各員によつて愛され・尊敬され・奉仕され・識られなければならぬ。血液の運行によつて、われらの身體の肢體が絶えず、相互に生命的關係を持續し得るやうに、聖靈と愛との交際を取り換はし、首の生命が各員にさまたげられること無く注がれる時にのみ、キリストの身體は大きくなりまた強くなつて行くのである。聖餐の執行は、かゝる一致の結論とも見るべきもので、たゞ主との一致のみならず、聖卓に侍る凡てのものとの一致の結論であり、その結果、われらが互のために生きて行くことを得せしめるものなのである。たゞに私とそのパンを食するところの主に對する愛が願望と約束と祈禱との目的であるのみならず、私とともにそのパンを食するところの凡ての人々に對する主の愛が目的であらねばならない。

めぐみ深き主よ、この眞理を正しく感ずることを得しめたまへ。爾がわれに分ち給ふところのこのパンに於て眞實に爾との交際を保つが如く、聖卓に於て偕に

パンを分つところの人々とも交際を保つなり。われ爾を受くるが如く、また彼等を受くるなり。われ爾に告白し、愛し、また仕へまつる如く、彼等にもしか爲すなり。われ今爾の前に我が古き罪——利己・非情・羨望・忿怒・他人に對する無關心を謙遜に告白したてまつる。大膽に、且つ誠實に、われは爾に向ひて、爾の衷にある柔和・憐憫・愛がわれにも注がれんことを祈求したてまつる。おゝ、みづからを我に與へ給ひしイエスよ、わが衷にもまたわれと偕に一つパンを食する凡ての人々の上にも爾のけだかき愛を與へ給へ。アーメン。

九、祝の酒杯

「我らが祝ふところの祝の酒杯。」(コリント前書十章十六節)

(註) オランダ譯では「我らが感謝をもつて祝ふところの感謝の酒杯」となつてゐる。

聖餐は元來感謝の祭である。「イエス、パンを取り、祝してさき」「また酒杯を取り、謝して彼らに與へ給ふ」。かくて聖餐の後「かれら讚美をうたひて後」オリブ山に行つた。ユダヤの作者達から、我らはまた過越の三つ目の杯は新しき契約の杯として聖別され、それが感謝の杯と稱せられたこと、それが飲まれてゐる間、詩篇第十六篇から百十八篇が歌はれたといふことを學ぶのである。

聖餐は贖罪の莊嚴であり、贖はれたる者の祭であり、神御自身がわれらに「いざわれら食し樂しまん」と仰せられる喜ばしき食事である。而してまた、それは感謝の饗宴であつて、そこには神の仔羊の歌の前奏曲が聞えて来る。どうか喜ば

しく、感謝してそれに侍るためにみめぐみを求めよう。

かくて私は神をあがめまつらう。「讚美をさゝぐるものは、我をあがむるなり」。神はその民から敬はれ給ふことが少ない。よろこびに充ちた、感謝の念の深い基督者は、神が彼に仕へまつる人々を幸福にし給ふことを證明する。彼は他の人々をも勵まして彼とともに神をあがめしめる。

かくしてわれら聖餐を正しく樂しむことが出来る。傷ましい心では食すことは出来ない。よろこばしい心は食物を樂しむ。自分の受けたもの、また主が備へ給うたものを感謝することは、更に受けるための最も正確な道である。

かくしてわれらは戦闘と勝利とのために強められる。「感謝すべき哉、神は何時にもキリストにより、我らを執へて凱旋し……」。「感謝すべき哉、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を與へたまふ」。われらの救主が聖餐の席から歌ひつゞゲツセマネに於ける戦ひに赴むかれたからには、主の贖罪をよろこんで、主がわれらを召し給ふところのあらゆる戦ひに感謝を以て従はふではないか。

かくして天の聖靈はわれらの心に宿り給ふであらう。神の寶座に近づけば近づくほど、ますます感謝がまし加はつてゆく。私はその事を黙示録に於て見る。天に於て彼等は日夜神をあがめまつる。感謝の精神に溢れたる聖餐はそれを豫め示してゐる。

而してわがたましひよ、汝は感謝すべき充分の理由がある。イエスとその血・その贖罪・その愛・その尊き交際とを見よ。而して汝の心のうちにある凡てのものでして主をあがめしめよ！ われらが飲み感謝を捧げるところの感謝の酒杯を充分に呑むことを得しめたまへ。

わが贖主、わが友なる尊き主よ、われ遡りて爾に祈りたてまつる。終日わが口をして爾の讚美にて充たしめ、汝の榮光にて充たしめ給へ。爾わが救となり給ひたれば、爾は眞にわが力またわが歌にて在はします。主よ、願はくは今日感謝を以て酒杯をとりて飲み、爾の御顔の前によるこぶ事を得しめ給へ。この目的のためには、爾はたゞ爾の容貌より流れ出づる愛のうちに、而して爾のものたらし

給ふ貴き贖罪のうちに、己を我に現し給ふべきなり。かくてわが靈魂はよろこびに充ち足らはん。この目的のために汝は聖餐を制定し給ひしにあらすや？ 貴き救主よ！ 感謝を以て、われ杯をわが手に執らむ。而して爾が愛を以て我を充たし給ひ、よろこびを以てわが心を充たし給ひ、讚美を以て我が口を充たし給ふとの確信を以てすることを得む。わが靈魂よ、よきものを以て、わが口を満ち足しめ給ふ主をあがめなむ。アーメン。

十、來り給ふ時まで

「主の死を示して其の來りたまふ時にまで及ぶなり。」(コリント前書十一章二十六節)
 「われ汝らに告ぐ、わが父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄の果より成るものを飲まじ。」(マタイ傳二十六章二十九節)

「わが父の我に任じ給へることく、我も亦なんぢらに國を任ず。これ汝らの我が國にて我が食卓に飲食し。」(ルカ傳二十二章二十九、三十節)

聖餐に於て主は我等に退くべきことを示し給ふのみならず、また進むべきことをも示し給ふ。苦難より主は榮光を示し給ふ。低きより主は高きを示し給ふ。聖餐は活ける救主イエスの記憶また交際なるが故に、それは彼を嘗て昔在し、今在し、後來り給ふまゝの姿にて我らの前に現すのである。聖餐に於て始められたものを充分に識ることが出来るのは、たゞ未來に於てのみである。聖餐は十字架の下に

此の世との和合によつて始る。そしてそれは世界の新生に於て榮光の座の前に完成する。信仰が、この天の食物の能力を體驗することによつて、必至的に未來に繋がるのはこのためである。眞の基督者は、猶ほもその繼承を待望して居る。來り給ふ時まで——これこそ聖餐を守ることに彼がとなへる標語である。聖餐に於て主は父の御國に於て、新しく葡萄の果汁をのむことを語り、御國の聖卓に於ける飲食について語られる。逾越の祭の前兆の成就であるところの聖餐は、その代り、來るべき祝福の前兆であり、かれらが「羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり」と叫ぶ時の保證である。

それにしても何たる望みであらうか！ そこには罪は永久に除去されてゐる。そこには全教會が過失なく、分離なくして、永遠に一致してゐる。そこでは全創造物は、神の子等の榮光の自由を得てゐる。そこでは眼は美しの王を見る。そしてありのまゝの主を見たとまつるが故に、われらも彼の如くなるのである。

よろこばしき思念よ！ そこでは必ずしも今あるが如くではないであらう。聖

餐の祝福は、たゞその點滴にしか過ぎない。イエス御自身、明白に來り給ふ。しかり、かくして我等は彼とともに坐するであらう。しかり、主は來り給ふ。而して私は彼を見、彼を知るであらう。而して彼また我を知り、我を見給ふであらう。而してその御膝許にひれ伏さむ時、主は我が名をもて呼び給ふであらう。そして主の御胸に我を憩はしめ、永遠に離るゝことなく我を彼と一つならしめ給ふであらう。

聖三位一體の神に對する感謝の祈禱

(聖餐の主日の晩のため)

三位一體の神よ！ われはこのよろこばしき祭日に於て、わが全心を爾の前にそゝぎ出さんがために來る。われは、わがたましひを祈禱と祈願とのうちに爾に向ひて上げ、そのために爾を頌めまつる間、爾がわれに賜ひたることを新に樂しまんとす。

主イエスの父なる神よ、爾が我に示し給ひたる驚くべき愛の故にわが感謝を受け給へ。爾のみこゝろのうちに、爾の獨子の傍の座を我がために準備し給ひしが故に、而して子たる名と權利とを以て我を遇するために來り給ひしことの故に、また、われに子等のためのパンを分ち給ひし事により、終日この特權をわがために保存し給ひしが故に、感謝したてまつる。これらのことの故にわがたましひは

爾をあげたてまつらんことを願ふなり。おゝわが父よ！ われは自らを、爾の子として新に置き、爾にありて自ら喜ばんがため、また活ける犠牲として爾に自らを捧げまつらんとす。父よ、わが心が切に求むるは、全く爾のために生き、終日、爾に在る歡喜に充たされて主をあげまつり、火による感謝の捧げ物として自己を祭壇に焼きつゞけんことなり。父よ、今日恵み給ひたる子の讚美・感謝・愛を受け給はんことを！ 而して日々わが心のうちに、「言ひ盡しがたき神の賜物につきて感謝す」との歌もて歩む恵みを與へ給はんことを！

この日、又も主より賜はりたるものに關し、父の御子、われらの主イエスよ、われ如何に爾に語りまつらん！ 爾のわれに對する愛に對して如何に頌へまつるべき！ 尊き救主よ！ 爾は永遠に己をわがものとして與へ給へり。爾と我とを繋ぐ帯は永遠に破るゝことなからん。如何となればその帯は爾の愛にして、それは死より強ければなり。しかり、爾の愛がつくり給ひたる帯は、爾御自身の聖き生命なればなり。爾の衷にある生命を爾は我に與へ給へり。爾はわれを爾と一つた

らしめ給へり。我は爾の骨肉なり。神の御子よ、わがたましひはいかにしてもかかる事を考ふる能はず。われは卑下して跪つき、己を新に爾にさゝげたてまつるのみ。おゝわが神よ！ 爾は我を全く所有せんとのぞみ給ふ。こゝに爾によりて全く領盡せらるゝ我あり。而して爾の與へ給ふ聖靈によりて充たさるべき我あり。而して父と御子との靈よ！ この日、爾がわれらに對して在り給ひし事に對し、爾をいかに頌へまつるべき！ 爾によりて我は父と御子とを所有し、樂しむことを得たるなり。父と御子とより賜はりたる凡ての祝福は、爾を通して與へられたるなり。爾はその聖き御能力によりて、心靈生活に必要なあらゆるものをわがうちに造り給へり。この日わが受け且つ樂しみたることは、凡て爾がわがうちに爲し給ひたるものなり。而してわれ、父の愛と御子の恩恵との充分なる分與を受くるものとなるまで、爾はそれらを保有し且つ強め給ふなり。おゝ神の聖靈よ！ わがたましひは爾をあげむ。わが遅鈍と、暗愚とも拘らず、爾は如何に長く忍び、耐へ給ひしぞ！ 父と御子と偕にわれは爾を崇め、愛し、爾と爾との交際を

よろこぶ。

三位一體なる契約の神よ！ 爾に對する我のこの新しき獻身をうけ給へ、爾はわが凡ての救、永遠の分前にこそあれ！ おゝ今日われに賜ひし爾の恩恵の封印をもつとも確實なる方法に於て堅からしめたまへ。而して我を爾の誓友として主の御能力のうちに進ましめ、爾の義を示し、爾のみを示すことを得しめ給へ。ア
ーメン。

第三部 聖餐後の週

やがてわれ起つ。象徴は消え失す。

愛は過ぎ行くことなきも、響應はすぎ行く。

パンと葡萄酒とは移されたるも、爾はこゝに在す。

以前に増して近く、わが楯たり、わが太陽にて在り給ふ。

われは爾の外に助けなし。また爾の外にわれ継るべき腕を持たじ。

わが主よ、充分なり。これにて充分なり。

わが強さは爾の能力のうち在り。

しかり爾の能力のみの裏に在り。

我が持つものは罪、爾のものは義なり。

我が持つものは咎にして、爾のものは潔むる血なり。

こゝにわが衣あり、隠るゝ蔭あり、わが平和あり。

——爾の血、爾の義、おゝ神よ、わが主よ！

祭は祭と相繼いで往來す、

しかも去り行く時、上なるよろこばしき祭を指示し、

その祭の日、即ち羔羊の大なる

歡喜と愛との婚筵の甘美なる豫想を與ふ。

ホレイシウム・ポーター

月曜日朝

食物の能力

「夫わが肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。」(ヨハネ傳六章五十五、五十六節)

生命は生命を以て養はれなければならない。穀物のうちには自然の生命が隠されて居るが、我等はパンのうちにその生命の能力を楽しむ。肉體に於てさうである如くに、精神に於ても同様である。肉體は可視的な、變り行く生命で養はれる。精神は見えざる、變りない天の生命によつて養はれる。

神の御子が地上に降り給うたのは、この天上的生命を我らにもたらすためであった。主が大地の種子のやうに死に給ひ、その御體が、パン種の如くに裂かれる

のは、この生命を我等に享け入れられるものとすためであつた。主が聖餐に於て御自身を我等に與へ給ふのは、この生命を我等に傳へ、我等のものと爲し給ふためである。

その死によつてイエスは我等の永遠の飢餓と悲哀、即ち、罪の原因を除き去り給うた。人間の、不滅の部分であるところの精神は、「彼のみ永生を有し給ふ」ところの神によりてのみ生きることが出来る。罪は人間を神から離反せしめ、而して永遠の飢餓と永遠の死の飢渴とは彼の分け前となつた。彼は神を失ひ、而も世の如何なるものも、その無限の欲求を充たすことは出来ない。しかるにイエスが來り給ふ。彼は罪をとり去り、己が身體のうちにそれを滅し、而してその身體を我等に與へて食せしめ、且つ、我等のうちに在る罪を亡し給ふ。而してイエスのうちに肉體的に神の充實が内住してゐるからには、われらが彼を受け、彼を樂しむときは何時でも、たゞに罪の赦しを受けることが出来るのみならず、神の生命、天の生命が我等のうちに植えつけられるのである。

驚くべき恩恵よ！ どうかそれをよく了解したいものだ。主の聖餐を正しく受ける人は、生命のパンをいたゞいたといふ事實によつて、他の人々とは異なるのである。彼はイエス・キリストをその深奥の存在のうちに受け入れる。而してそれが天の生命なるが故に、永生の能力をも彼と共に受けるのである。神が御子をたましひの食物として與へ給うたのは、彼御自身の永遠の生命を我等に近く齎し給ふことなのである。

尊き食物よ！ 驚くべく神聖なるパンよ！ 神に對する愛、めぐまれたる休息、眞の聖潔、内的能力、かくの如き天國にて樂しまるべき生活を特色づける凡てのものが、わが衷にあつてこの生命のパンの結ぶ實たり得るように！

どうか我等が養はれてゐるところの食物の驚くべき價値を憶へ信じたい。どうかこの食物が我等がうちにその聖なる能力を働かせるといふ強く期待を持ちたいものだ。どうか我を強め給ふキリストによつて萬事を爲し得ることを識り、愉快に、勇氣りん／＼として歩み度い。如何となればキリストは私に力を與へ給ふか

らである。キリストはわが衷に居給ふ。キリストはわが食物である。

祈 禱

貴き主よ、なんぢの恩恵はいかにくすしき哉、爾はわが食物となり、わがうちに宿り、われを力づけ、わがうちに在る生命を支へ、増し加へ給ふなり。

主よ、今朝、わが爾に熱心に求むる恩典あり、そは爾がわが信仰を増し加へ給ふこと、而して爾がわがために備へ給ひしものを正しく知ることを得んことなり。爾がわがために何たらんとし給ふか、または何を爲さんとし給ふかを了解せざるは、まことにわが弱點として咎めらるべきものなるを痛感す。

貴き主よ、願はくは、われにこれをしらしめ給へ。絶へず次の如く言ひ得る信仰を強めたまへ。即ちイエスはわがうちに宿り、イエスはわが食物なりと言ひ得ることなり。かくの如き營養にやしなはれ、わが生命は神の榮光のために強めらるることを得しめ給へ。爾がつねにわがあらゆる必要に應じ給ふことを了解する

信仰を強めたまへ。爾はあらゆる必要に對する供給にして、あらゆる希望の満足なり。主よ、わが信仰を強めて、最早わが弱きにつきて考ふることなく、爾の能力のみを考ふることを得しめ給へ。おゝわが主よ、如何となれば爾はわが食物、わが生命の能力にて在せばなり。特にわが信仰を強めて、この天よりの食物を營養として拜領し、爾御自身によりて充たさるゝために、日毎わが口を大きく開くことを得しめたまへ。

主イエス、わがうちに宿り給ふ、わが食物よ、爾たしかに、これを爲し給ふなり。アーメン。

火曜日朝

聖潔

「再び罪を犯すな。」(ヨハネ傳五章十四節、八章十一節)

イエスはベツサイダの池のほとりで病人を癒された時かく言はれた。また迫害者たちの手から一婦人を救はれたときもかく言はれた。而して彼が憐憫を現し、病を癒し、その生命を破滅から贖ひ出し給うたあらゆる靈魂に對しても、かく言はれる。まためぐまれたる聖餐から立ち去る凡ての人々にもかく語られる。「行け、再び罪を犯すな」。

神が御子を世に遣し給うたのも、イエスがその生命と血とを與へ給うたのも、聖靈が天より降つたのも、悉くわれらの罪を救はんためであつた。贖主は、贖

ひ給うた靈魂をこのかゞやかしき言葉、即ち「この後……ふたゝび罪を犯すな」を新しく聞かせ給ふことなくして、契約の卓から立ち去らせ給ふやうな事はない。十字架と、あなた方の罪が、如何に彼に犠牲を拂はせたかといふことから見て、またあなた方に與へられたところの彼の愛と、あらゆる祝福とから考へて、「行け……再び罪を犯すな」といふ言葉は聖い力をもつて迫つて来る。

「しかし乍ら、主よ、私は常に罪を犯さざるを得ないではありませんか。わが裏には何の良いものもありません。基督者は絶えず、終りまで罪を犯すと私は思ひます。」

「われ罪の力より爾を贖つたではないか。わが聖靈が汝のうちに宿つては居ないか。われ自身が汝の聖潔そのものではないのか?」

「しかし乍ら、主よ、誰か此の世に於て全く聖潔められる事が出来ませうか。」
 「汝は罪の性質は持ちつゞけるであらうが、その働きは克服されてしまつたのだ。なんぢは日毎に聖くなつて行くことが出来よう。私は汝が求め、考へる凡て

に勝つて汝のためによろこんで盡すのだ。」

「おゝわが愛しまつる主よ、如何にかして私は聖潔になり度く存じます。主は罪が如何に私を歎かせるか、如何に聖潔を熱望してゐるかをよく御存じであります。おゝ、願はくは、私が如何にして聖なることが出来るかを教へていただき度く存じます。」

「たましひよ、私は汝の聖潔そのものである。われに在れ、されば汝は聖められるであらう。汝自身を我に依存せしめよ、されば汝を聖く保つであらう。私が必ず自分の言つたことを成就すると信じることをせよ。どうか私の言葉・私の意志・私の心意が汝の想念を保ち、なんぢの心を占有するやうに！ また私をして汝の心情のうちに住ましめよ——なんぢの心情が私によつて溢れるやうに。さすればそれによつて罪は驅逐されるであらう。」

「おゝ主よ、私の場合でも、そのやうであり得ませうか？」

「たましひよ、わか前にひれ伏し、私に對して汝自身を犠牲として捧げよ。不

信仰でなく、たゞ信ずることをせよ。なんぢの弱さや、死せる凡てのものを眺めてはならない。私に堅信の譽を私に向つて捧げよ。そして、私が約せしことについては必ず力強く、誠實に實行すること、そしてそれは汝の信仰に従つて爲さるべきことを確信せよ。」

「主よ、私は御前に來りました。私は爾の御前にひれ伏し、爾に對して犠牲として私自身を捧げます。」

祈 禱

(すべての罪から潔められるために、主に己を捧げたたましひについての祈禱)

恵み深き主よ、爾はわが聖潔にて在す。爾より我は常に命令を受くるのみならず、爾のうちに、更に進みて、最早や罪を犯すことなき力を受くるなり。主よ、我は今新に爾に己を捧ぐ、而して、あらゆる罪より己の潔められたきことを願ふものなり。

すべてわが認めたるあらゆる知られたる罪を、この時、我は斷乎としてしりぞけんとす。それがいかに根深く植え付けられあらんとも、それを克服する力のいかに貧弱なるを覺ゆるとも、めぐみある贖主よ、爾の御名によりて、われはこれを否むなり。われは爾に己をさへげて、爾のみちからによつてこれと闘ひ、これを克服せんとす。主よ、われこゝに在り。そは主があらゆる不正より我を淨め給はんがためなり。主よ、これぞ我が祈禱なれ！ それがいかに大なる犠牲とならんとも、それによりて如何に苦惱と卑下とが生ずるとも、願はくは我より罪をとり去り給へ。主よ、一つの罪をも見過しにし給ふこと勿れ。われを聖からしめ給へ。

而もわが衷にあり乍ら、未だ自ら知らざる罪をも同様になし給へ。——そは爾の民または世、または爾御自身が我が衷に視給ふところの罪なれども、我はみづからの利己的愛によりて自ら知らんとせざる罪なり。されど我、みづからを爾の御手に置きたてまつる。主よ、われをしてそを知ることを得しめ給へ。友にても

敵にてもあれ、それを用ひて、我をして罪をしらしめたまへ。かくて罪をして、いつまでも我が衷にかくるゝところなからしめたまへ。われはその罪をしらんことをこそ願へ。かくして爾の前に罪を携へ出し、爾が我を罪よりきよめ給はんがためなり。

貴き救主よ、願はくは我が信仰を強め、かくして喜びて爾にたよりて爾がわが聖潔としてみづからを示し給はんことを願ふなり。爾はわが保證なり。たゞ古き罪過を贖ひ給ひしのみならず、主は刻々、つねに神の律法の要求が、われによりて充たさるゝを視給ふ位置に居給ふなり。主よ、われをしてこれを信ぜしめ給へ。而していかに不斷に爾がわが靈魂を支へ、潔め給ふかといふ體驗に常に信賴する生活を以てこれを信ずることを得しめたまへ！ かくして聖餐の執行より退きてしかも爾がわが日毎の糧なること、またわが日毎の力なることを知るに到らむ。しかして爾の生命はわが生命の生命にして、爾がまた——「イエスよ、來りてわがうちに生み、われをして聖きものたらしめよ」といふわが祈禱を聞き給ふこと

を識るに到らしめたまへ。主よ、いまわれこゝに在り、我は爾に己を捧げ、爾のうちを守られ、潔められんとす。爾のみことばに我はみづからを確信を以て捧ぐるなり。アーメン。

水曜日朝

従順

「イエス言ひ給ふ『われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは、是れわが食物なり。』」(ヨハネ傳四章三十四節)

「われには汝らの知らぬ食物あり」との御ことば通り、イエスは彼が父から受け給うた隠れたマナを有して居られた。而してそれこそ彼の驚くべき能力の秘訣であつた。彼の生命の營養を主は天の神からいたゞかれた。誰もそれが何であるかを發見しなかつた。しかし乍ら、一度主が我等にそれを語られる時には、それはあまりにも單純であつて、多くの者がそれについて當惑する位である。「われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐるは是れわが食物なり」。

食物は要求に應ずるものであつて、即ち満足そのものである。イエスの飢餓。イエスの憧憬は、たゞ一つに向つてゐた。それは神を喜ばせるといふ一事であつた。これなくしてはイエスに休息はなかつた。この一事のうちに、主はその求めたまふ凡てのものがある。主は神の御意を發見されたときは、彼はそれを實踐したまうた。かくしてたゞちに適當なる食物によつて其の靈魂を養はれ、満足し給うた。

食物は專有を含んで居り、また共同の實行を意味する。弱いたましひも、神の御意に自らを全く委ねるときには、不思議に強められてくるのである。神に従順であることは、精力を消耗する代りに、それらを刷新せしめる。神の御意を實行することはイエスの持つて居られし食物であつた。

食物はまた潑刺たらしめ、歡喜をも含む。食事はたゞに體力への藥として必要である計りでなく、それは快心のものであり、また愉快を與ふるものである。精神のうちで饗宴を守るといふことは食物に相當する。しかして神の御意に對する

従順はイエスの最高の歡喜であつた。

神の御意を實踐された方として、イエスは我等の救主となりたまうたのである（ヘブル書十章九、十節）。故にイエスに信賴するところの者は、主を神の御意の成就者として享け入れ、而して主と共に、彼らの生命としての神の御意を受ける。

しかるに今や、イエスはわが食物となり給うた。主御自身わが生命の能力としてわが裏に宿り給ふ。今やわれは、それによつて此の生命が養はれ、わが裏に強めらるゝ方法を知つてゐる。神の御意を行ふことは、これはわが食物である。神の御意を行ふことはイエスにとつてはまた天のパンであつた。今や私がイエス御自身をわが天よりのパンとして受けるとき、主は私に彼自身食されたものをも食するやうに教へ給ふ。主は神の御意を行ふことを教へ給ふ。而してそれこそ私のだましひの食物である。私は主のうちにありしと同じ聖靈を受けた。而してそれは私のためには眞理となつた。丁度主に對してさうであつたと同じである。わが

糧、わがたましひの最高の満足、壞たるゝことなき歡喜の饗應は、「われを遣し給へる者の御意を行ひ、その御業をなし遂ぐる」ことである。かく聖餐の祭は神の御意に對して從順なる生活のうちに延長される。

祈 禱

永遠の神よ、われは御子にありて爾がわれらをしてこの地上に在りて天の榮光ある生活に思を馳することを得しめ給ふが故に感謝したてまつる。われはまた爾のみこゝろを行ふことのうちに、己が食物、己が生命を見出し給へる主を見るが故に感謝したてまつる。主なる神よ、聖餐のうちに爾はその御子をわれに與へ給へり。そは、御子の生命がわが生命となり、御子の靈がわが靈とならんためなり。主よ、願はくは全く主イエスと一體となり、我も亦かれの如く父のみこゝろを行ふことを以てわが食物とすることを得しめたまへ。

主イエスよ、これぞわがために爾が備へ給ひし不斷の祭なる。日毎われも亦父

なる神の御意を實行し得む。願はくはこの從順をして、我がためには聖餐の饗宴の繼續たらしめたまへ。願はくはわがたましひをして盡るなき飢渴をもつて萬事に神の御意を知り得るよう務めさせ給へ。聖き力を持ち給へる主御自身が、わが衷にあらゆる從順を充たしたまへ。而してわが内なる生活をして、最も強く、最もよろこばしきものたることを得しめ給へ。

主よ、われはいかに神のみこゝろに對する洞察の貧弱なるかを告白せんとす。主よ、われに爾の靈を與へたまへ。そはわが心の更新によりてわれ亦更新せしめられんがためなり。かくして神のよき、全き、且つよろこばしきみこゝろの何たるかを知ることを得ん。主よ、願はくは我に、主の如くに、父のみこゝろにあらざれば何事をなすことをも否むが如き恵まれたる心境を與へ給はんことを。願はくはわが信仰を強め、聖靈によりて、爾が我をして神のみこゝろを更に充分に了解するに到らしめたまへ。而して、神のみこゝろのうちに我が全く且つ備はりて立つことを得んがためなり。

おゝわが救主よ、わが爲すこと凡てが、「みこゝろの天になるが如く、地にも
 ならせ給へ」といふ祈禱に對する從順そのものなる時、わがたましひはいかに満
 足し、爾を頌へまつるならむ。主よ、願はくはわれにこの糧を與へ給へ。アーメ
 ン。

木曜日朝

勤勞

「人もし働くことを欲せずば、食すべからず。」(ヘテサロニケ後書三章十節)

これこそ世のいはゆる怠慢者については眞實である。彼は食すべきものがない。
 之はまた被備者についても眞理である。彼は若し自分がよく働かなかつたならば
 主人が彼に食すべき糧を與へるとは期待し得ない。これはまた富める怠慢者にと
 つても同じである。彼は勿論豊に持つては居るのだけれども、もし働かなければ
 食物を旨くたべさせる空腹を缺くのである。

この事は精神上の糧に於ても同じである。神の國は飲食ではない。そこでは斷
 じて怠慢のパンを食することはあり得ない。イスラエル人は腰に帶し、足に靴を

はき、手に杖を持ち、その楽しんでとつた食物の勢でカナンに向け旅に出る用意をして、過越の食事を取つたのだ。

この事實は、多くの人々にとつて聖餐に於て分たれるところの祝福がそれよりも大きくないといふ理由を我等に示すことにはならないだらうか？ 彼らがそれをとるのは、楽しい饗宴の時を持たんがためであり、喜ばしい愉樂や輝かしい経験で満足するためにそれを分たれんことを願つてゐる。しかし乍ら、かれらは主がその子等のために食を設け給ふのは、それによつて強められて彼らが主の葡萄島に行つて働くためであることを考へては居ない。彼等はその主のために働かない。彼等はその爲すべきところを知らない。彼等はその事をよく考へない。かくして彼等は屢々聖餐に於ける祝福のないことや、漠然たることを歎くのである。

「人もし働くことを欲せずば、食すべからず。」人もし働かば、食を得べし。」自然にも恩寵にも一つの法則がある。たゞ食物を得んため、または口腹を充たすために食することを望む人は、必ずや、速く食物の樂しみを失ふにきまつてゐる。

強くなり、働くために食する者は、その食物が常に爽快を伴ひ、また力を分たれることを發見するであらう。

基督者よ！ 汝は再び食にあづかつた。今や働くべき時である。なんぢの主の業を爲せ。神の御國のために生き且つ働け。さすれば主は汝が食物を必ず受けるやうになさる。而してその食物があなた方にとつて美味と祝福との源泉になるやうにして下さるであらう。これはこの世の親の世話に於けると同じく、天の父の場合に於ても同じである。聖餐の最上の準備は、天の御旨を忠實になすことであり、その御業を成し遂げるにある。いと高き神の祭司たるメルキセデクがアブラハムの前にパンと葡萄酒とを置いたのは、アブラハムがロトを救ふための戦から凱旋したときに於てであつた。「勝を得る者には」——その意味は「よく働き、務め、打ち克つものには」であるが——「我かくれたるマナを與へん」。

聖き主、わが贖罪主、わが友よ、爾のために働くはわが願ひなれ。この目的のために爾は己をわれらに與へ給ひしことを知る。而してなんぢは我らを、よき業に熱心なる特別の民として己がものとなすことをのぞみ給ふを知る。父のみこゝろを爲し、主がわれらに與へ給ひし業を成すこと以外に祝福なきことをも知る。主よわれは、爾がわがたましひの營養として備へ給ひたる食物が與へたる勇氣と力とよろこびとを以て、わが業を爾にたづねもとめんとて、みもとにいたる。

主よ、われにも爲すべき業ありと信ず、爾かならず、それを我に示し給はん。屢々己が感情のまゝに爾のために勞せんと願ひたり、而して斯るとき必ず失敗したり。主イエスよ、わが爲さざるべからざる業を示したまへ。主はわが糧わが力なり。またわが光わが導き手なり、爾の靈わがうちに宿りて、我をして爾のみこゝろを聞き分くることを得しめ、それによりて奮ひ起され、たましひのためにわが業をすゝめゆくことを得しめ給へ。

主よ、われは天のパンを食したり。さればわれは天の業をなすために生きん。

天の食は天の力をもたらし、天の力は天の業を営ましめん。主よ願はくは我をして主の共働者たることを得せしめたまへ。而して、爾の如く、天國の業に對して全く自己の生命をさゝぐることを教へたまへ。願はくは我が最大のよろこびをして天國に於て悔改めし罪人の上に與へらるゝ如きよろこびにてあらしめ給へ。

而してかゝる業はわれをして爾の聖きみちからの必要を感じしむ。またかゝる業は我をしてなんぢの食を正しく樂しましむ。かゝる業は聖餐の執行毎に、それがわれにとりてますゝ有難きものたらしめむ。それと共に爾とのより深き交際の實行たらしむるに到らむ、その如くにてあれかし。おゝわが主よ。アーメン。

イエスとの交際

「視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり。」(マタイ傳二十八章二十節)

「汝らのために」——これはイエスが聖卓に於ける御言の一つであつた。

「汝らと偕に」——これはあなた方が聖卓から離れるとき、前言に劣らぬ主の御言である。罪を負ひ、あなた方のためにその生命を與へ給うた時のイエスの保證が眞實であるのと同様に、「世の終りまで常に汝らと偕に在るなり」と仰せられた時、汝らのために示されたる交際もやはり確實であり眞實である。若しも、「汝らのために」が色んな方面より見て、不可分であり、充分であるとしたならば「汝らと偕に」も亦あらゆる方面より見て、不可分であり、充分であるべきだ。

而してこれは、もう一つの言葉と同じく信仰の言である。信仰者に對してのみ啓示される言である。「汝らのために」は最初はあなたがこれを受けることがむづかしい眞理である。しかし乍ら神の聖靈は享受の點にまであなた方を引き揚げ給ふ。而してあなた方は言ふことが出来るやうになる。「しかり、イエスはこの場に於て、正しくわがものである。凡てはわがために爲されたのだ」と。而して今やこれこそ、あなた方の靈魂の最も確實な、また最も深遠な確信である。而して「汝らと偕に」も亦これと同じやうに確信である筈だ。これは屢々眞實でないごとく思はれ、またあり得ないやうな事にも思はれる。また他の場合には若しも今在るやうに罪深く、いたましいものであるならば、永く生きることが出来ないと感じる。而もイエスが汝らと偕と在すことは眞實である。たゞそのことを識らないものだから、それを樂しむことが出来ないのである。如何となればあなた方はそれを信じないからである。然し乍ら自己の感情によるのではなく、彼の約束し給うたことに依存することを知るや否や、さうして主が汝らと偕に在すべしとの

たまたまところの、信仰による待望を主が導き給ふやうに依存し始めるとき、それはあなた方にとつて有難いことになつてくる。かくして「汝らと偕に」は丁度「汝らのために」のやうに確實であり、完全であるやうになる。

「我は汝らと偕に在るなり」。イエスは彼自身の民と偕に在り給ふ。主の臨在と愛との確實性は我等を捨て給はないであらう。彼は活ける、愛に充ちたる全能者にています。彼は我らと偕に在る。而して、己をわれらに知らしめ給ふ位置に居られる。

「常に汝等と偕に……」。主の偕に居給ふのは聖餐の日だけではない。人生の祭日計りではない。常にである。毎日である。一つの除外もないのである。而して終日である。われらがそれを考へると否とに拘はらず、主は終日、われらに近く、われらと偕に居給ふ。われらの確信によるのではなく、われらの確信を呼び起し、爾自身の親近を我等に與へ給ふ主御自身の誠實によつて、われらは爾との破れざる交際の確信を持つ事が出来るのである。おゝわがいつくしみ深き主よ！

祈 禱

めぐみ深き救主よ、「汝らと偕に」といふ御言の故に再びわが感謝を受け給はん事を。而して主よ、そのみことばを、信仰によりてわがものとなし得るよう教へ給へ。この目的のために今の時を、われを沈黙のうちに爾の御前に置き、爾を待ちたてまつる。主よ、これらのみことば「我は常に汝らと偕に在るなり」といふみことばを我に語り給へ。

主よ、主は變り給ふことなく、従つて、われと偕に臨在し給ふことも變らざることをわが知る時、それがいかに歡喜と力との源泉となることならむ。天に於て父の右の座をはなれ給ふことなきが如くに、この地上に於てもなんぢの兄弟を離れ賜はさらなむ。爾はわが右に在し給ふ。而して爾はそれを言ひ給へり。故にわれは眞なりと信する。「われ汝らをはなれず、汝らをすてじ。われは常に汝らと偕に在るなり」。貴き主よ、願はくは主のみことばをわが心の奥底に透徹せしめた

まへ。而してこの日、終日、日毎のわが生活を「我汝らに偕に在り」とのたまひし爾の御前に在らしめ給へ。

されど主よ、このみことばを信する事なくして、我はいかに多くのものを失ひたるか！ いかにも主を歎かせたてまつり、穢したてまつりしぞ！ 爾我と偕に在り！ 主はわれと偕に在し、愛の御聲は絶えず「われ汝らと偕に在り」とのたまふ。しかも不信の傲慢を以てわれはその聲に耳傾けざりき。屢々爾を把握したく祈り求むれども、現實には、主のみことばを信ぜざるが故に、爾を侮蔑し居たり。おゝわが救主よ！ 今後かくの如くならしめ給ふ勿れ！ わが信仰を強くし、われに至き贖罪のみことば「汝らのために」に依存したてまつる如く、至き交際のみことば「常に汝らと偕に」にも依存してそれがわが歡喜となり力となる事を得しめ給へ。しかり「汝らのために」が過去の諸罪に對する至き惠與にてあるが如くに「汝らと偕に」が、將來のあらゆる不安と罪とに對する等しく至き惠與たることを得しめ給へ。

しかり、主よ、主の御力にありて、かくの如くなれかし。われは信賴して恐るること勿らん。われを待つ日々がいかにあれ、「常に汝らとともに在り」といふ爾のみことばは我に足れり。爾の親近のうちにありて、爾との交際のうちにありて、否、むしろ爾の我との交際の裡にありて、わが生活は、「視よ、主よ、われとこしへまでも爾と偕に在るなり」と告白する終局の前兆たることを得るなり。

土曜日朝

終局

「主はわれに係れることを全うしたまはん。」(詩篇百三十八篇八節)

「我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。」(ピリピ書一章六節)

如何に屢々信者は、果して不斷に確固たることを得べきか如何との悲しき想念を抱きつゝ聖卓に參することであらうか？ われらの決心や約束が動搖していゝのであらうか。われ終りまで忍ばんと言はれたのは誰であらうか。「われいつの日か、ソウロの手によりて滅ぼされん」(サムエル前書二十七章一節)。
かゝる危機に於てダビデは歌つてゐる。「わがために百事をなしをへたまふ神

によばはん」(詩篇五十七篇二節)と。基督者が忍耐の確信を持ち得るのは神のうちにてのみである。始めより終りまで「初めにしてまた終り」なる御自身であり給ふことを見得るのは、これこそ永遠に住し給ふところの神の貴き屬性である。人間は屢々終りなくして始めるのに、始めも終りも同様に確實であるのは神の御業の特徴である。「始め給ひしものを主は成就し給ふ」。

おゝわがたましひよ、もしもこの約束の喜びを樂しまうとするならば、「主は始め給うた」といふ事實をよく心に會得することである。信者は屢々己が信仰・己が回心・己が自己服従につきて語る。而して人間の側よりそれらのことを考へて、「主始め給ふ」との思想に心奪はるゝ事が少ないのである。わがたましひよ、この意義を考へ見よ。主はわれを求め、われを見出し、われを主のものとなされた。かく今まで主が我に爲し給うたことは嘗て我に爲し給ひしことを回顧せしめる。主は御子を與へ、その血によつて我等を己が所有として贖ひ給うた。その事實は更に永遠について考へさせる。主は世の創められざる先より我を撰び、我を愛し

給うた。わがたましひよ、「主始め給へり」といふ意義について熟思せよ。
 さすれば汝は「主全うし給はん」と叫んで喜ぶことが出来るであらう。「主はわれに係れることを全うしたまはん」、かくして汝の生活は謙遜と感謝と確信と歡喜と愛との生活となるであらう。なんぢは自己には何物もなきことを知り、神より凡てを期待すべきを學び、凡てのことについて感謝するに到るであらう。なんぢは萬事に於て主に依存しまつることを學ぶ。かくして終は、始と同じく確實であらう。如何となれば、始も終も神のうちにその根源を有し、その安定を持つてゐるからである。始を神のものとして回顧するところの同じ信仰は、また未來をも翹望し、永遠不變の神のうちに終局が與へられることを發見する。「主は始め給ひしものを全うし給はん」。

祈
禱

主なる神よ、爾は無始無終にて在す、爾は始にも終にも同じ存在にて在せばな

り。爾は永遠に在し、昨日なく、明日もなし。爾みづから昨日にして今日、しかも永遠にて在したまふ。爾には變化もなく、轉換もなし。主よ爾のうちにのみ、信する者は慰安と安全とを發見し得るなり。わが爲せしこと、爲し度きこと、また在りしこと、在りたきこと、凡てはわれに休息を與へず。されど爾の御名に感謝すべき哉、爾自身、永遠にして不變なるを以て、わが休息またわが力にて在すなり。爾のうちにのみ、また爾の忠信のうちにのみ、わが生活はあらゆる恐怖より解放さるゝなり。

父よ、この事をさとらしめ給へ。願はくは爾はわがうちによき事を始め給ひし神たることを知らしめ給へ。願はくは、わが心にわれは爾のための所有として贖ひたまひしものにてあり、また爾にとりて大切なるものにてあり且つ誰も爾の御手より奪ひ去る能はざるものなることを銘記せしめたまへ。願はくはわが弱さと罪の意識の裡にありても常に「わがうちによき事を始め給ひし主はこれを全うし給はん」と信じ且つ叫ぶことを得しめ給へ。

父よ、再びわが拜領せる聖餐の故に感謝したてまつる。恵みある完全者よ！
 わが衷に爾の恩恵の業を全うし給はんことを。われによるこびに充ち確信と勇氣
 に充ち感謝と愛とに充ちて己が道をすゝみ行くことを教へたまへ。わが神よ、わ
 れにとりて凡てのものとなり給へ。萬てのことを爲し給ひし神、また爲し給ふ神、
 すべてのもので依つて存する神となり給へ。而してかゞやかしき終局を待望せし
 めたまへ。その時、われは始められたるものが全うされ、日々増々翼ひしもの
 が全うされ、神のめぐみの碑たることを得む。その時その上にはかく記されたる
 を見む。「よろづのものは神より出で、神により、神に歸するなり。榮光とこし
 へに神に在れ」。アーメン。

追 加

以上の頁に於て著者は屢々聖餐の準備のためのオランダの改革教會の指南書の
 記述を引用した。またハイデルベルヒ信仰問答の關係ある質問をも引用してゐる。
 故に英譯者は、讀者に對してそれらの章句を見せることが裨益するところ多しと
 思ふ。

一、自己省察

眞の自己檢討は三つの部分がある。

(一) 第一に各人自己の罪と審判とを心に考ふべきだ。それは神の前に自らを
 厭ひ且つ謙遜ならしめるためである。罪に對する神の忿怒の大きいことを知り、
 罰せられざるを苦しみ給ふほどであり、遂に御子イエス・キリストのいたましき

賤められたる死によりてそれを罰し給うたことを知ること。

(二) 第二にイエス・キリストの苦難によりてのみ彼の凡ての罪は赦され、キリストの全き義が彼に與へられ、また、彼自身の如くに彼にも與へられるといふ神のたしかな約束を信じてゐるかどうかに關して心を検討しなければならぬ。しかしそれは自分自身が己が罪のすべてを贖ひ、あらゆる義を全うした如きほどの完全さであらねばならない。

(三) 第三に、今より後、全生涯に於て主なる神に對して眞の感謝を現し、神のみまへに義しく歩み得るやう良心を檢討しなければならぬ。

かくの如く爲すものを神はよろこび受け給ふであらう。而して御子イエス・キリストの聖卓に於て立派な陪餐者として取扱ひ給ふであらう。之に反し、己が心にこれらの確證なきものは、自己自身に審判を飲み食ふであらう。

二、聖餐に於けるキリスト

問七十六「キリストの十字架につけられたる身體を食ひ、そゝがれたる血を飲む

とは如何なる意味ぞ。」

答、「それはたゞに信する心をもつてキリストの全苦難と死を受け、罪の赦しと永遠の生命を得ることを意味するのみならず、更に、キリストとわれらとに宿り給ふ聖靈によつて、主の聖き肉體に結びつくことである。即ち彼は天にあり我らは地にあれども、われらは彼と同じ血肉にして、永遠に一つ靈によつて治められ、一つ心によりて一つ肉體の肢體たることを得る意味である。」

問七十九「しからは、何故にキリストはパンを己が肉體と呼び、杯を己が血と呼び、血のうちなる新約と呼び給うたか。而して聖パウロはキリストの肉體と血との交際と云つたか。」

答、「キリストがかく言ひ給ひしは故無きにあらず、即ちパンと葡萄酒とが肉體的生命を支へることを教へ給ひしのみならず、また彼の十字架につけられし肉體と流されし血は永遠なる生命までも、われらのたましひの眞の食物また飲物

なることを教へ給うた。しかし乍ら更にこの可視的な象徴や保證で、肉體の口をもつて主を憶えてこの聖き表象をいたゞく時、われらが聖靈の働きによりて、主の眞の身體と血を分たれる者なることを教へ給ふ。また、主のあらゆる苦難と服従とが、恰もわれらが己が身に苦しみ、すべてを爲し終へたごとく、如實に主の苦痛と服従のすべてを確實ならしむることを教へられるのだ。」

主の聖餐(終)

昭和十三年六月十日 印刷納本
昭和十三年六月十五日 第一刷發行

主の聖餐

定價九十錢

版權所有

譯者 横井憲太郎
 發行者 横井憲太郎
名古屋市中區流川町十八番地
 印刷者 横井憲太郎
名古屋市中區流川町十八番地

Printed in Japan

發行所

名古屋市中區
流川町一八

一

粒

社

電話中(3)四三〇二番
振替名古屋九四四五番

書譯邦著原一レーマ・ールドンア

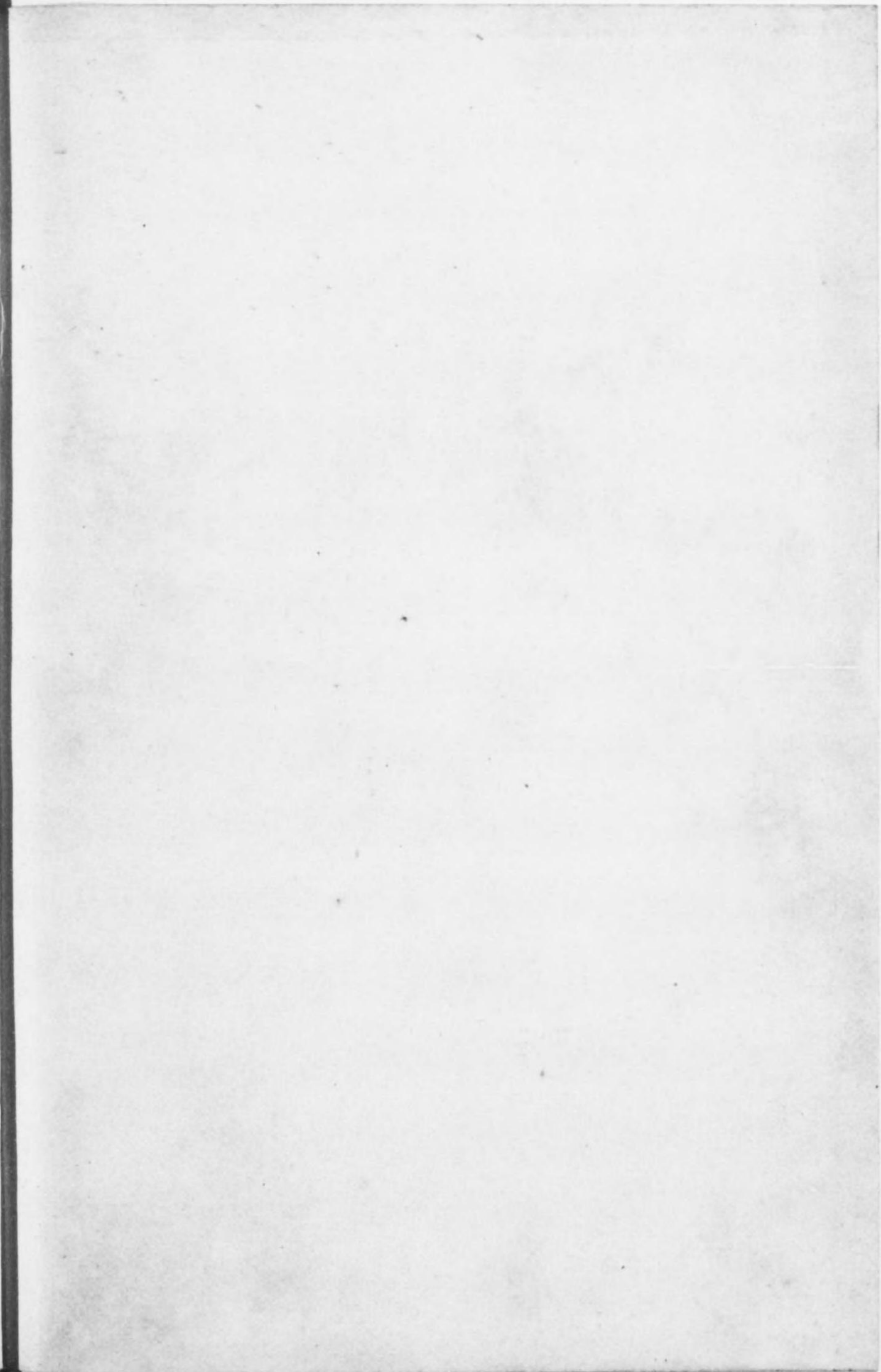
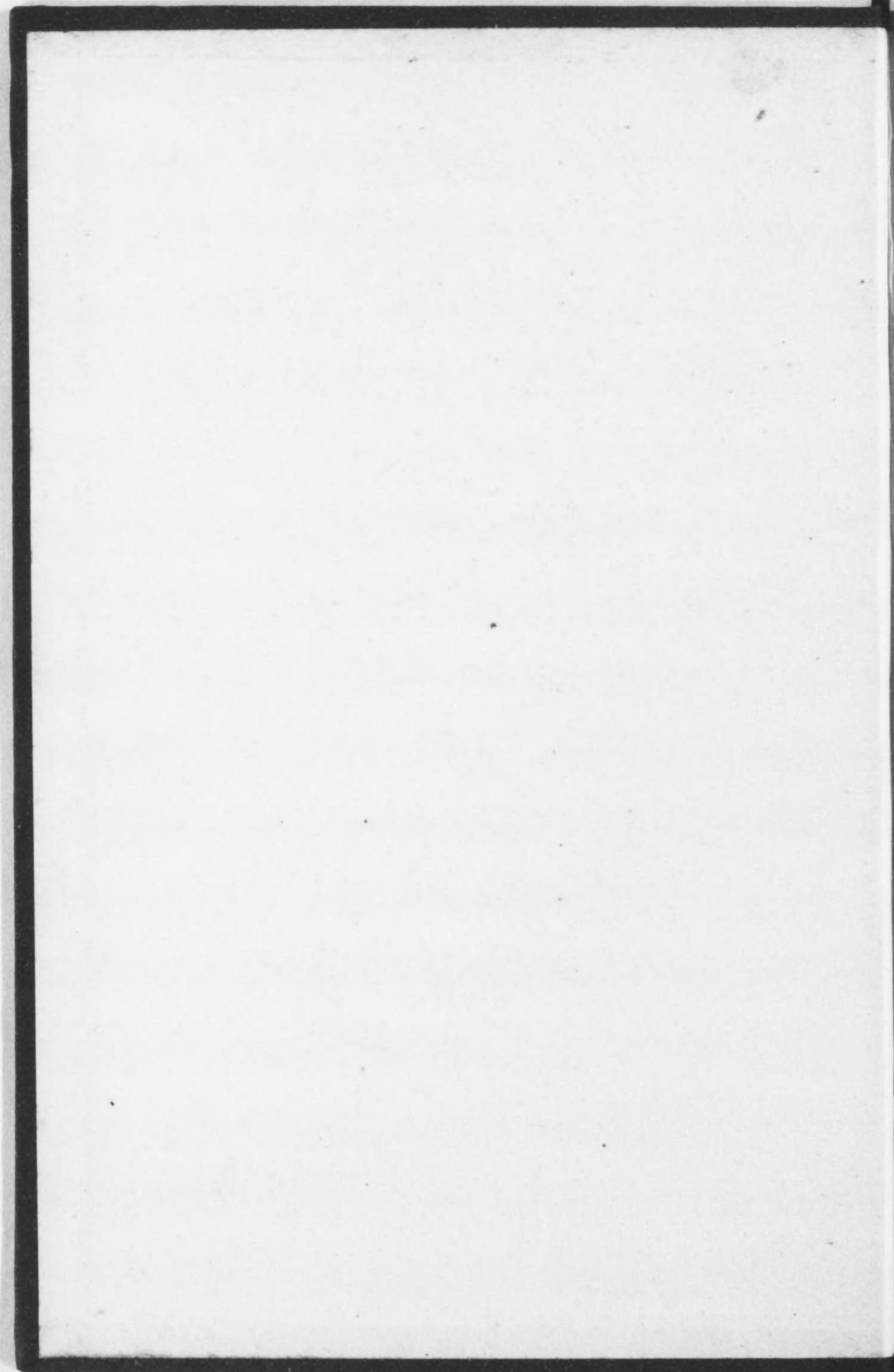
書良の仰信るな豊み恵にまごむ讀

全 主 十 神 一 力 聖 信 執 禮 兄
 く の 字 に 致 ある 靈 仰 成 拜 弟
 あ の 架 満 の の 祈 生 活 の 秘 奥 愛
 れ 聖 の 奥 祈 祈 秘 訣 義 義 義
 ！ 餐 義 涯 禱 禱 訣 義 義 義

四 四 四 四 三 二 三 六 四 九 七

三 三 三 三 三 三 三 六 三 六 六

社 粒 一 町川濱區中市屋古名 五四四九屋古名替振 発 兌



終

終